
R P G W (・ ∇ ・) R L D 蒼い騎士

治田 神裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPG W（・▽・）RLD 蒼い騎士

【Nコード】

N3135Q

【作者名】

治田 神裕

【あらすじ】

RPG『ギヤスパルクの復活』をプレイしていた主人公聖護院^{しやうごいん}大和^{やまと}は、気付いたらゲームの中にいた。しかもレベルはプレイした時のまま、そんなチートなステータスを持った大和は冒険心の赴くまま、エターナルを冒険して廻るが、途中、ある教団の野望を耳にする。

日本人をエターナルに召喚する教団の目的とは？はたして大和は教団の野望を阻止できるのか？

RPGW(・∀・)RLDの二次創作です。主人公最強系です。

プロローグ（前書き）

未熟ですが、頑張ります

プロローグ

もしゲームの世界に入れたら。

そんな想像を抱いたことはないだろうか？

俺、聖護院　大和は京都のとある寺の息子として産まれた。

一人息子だったため、当然俺は将来は寺を継ぐことになっていた。

周りの友人が夢について語る中、俺だけが決まった進路を進んでいた。

小さい時から礼儀作法を仕込まれ、いくつか念仏を唱えられるように修行させられていた俺だから反発して、少し荒れていた時期もあった。

しかしそんな荒んだ俺の心を癒してくれたのがゲームだ。

前記したように学校が終わって家に帰るなり修行を課されていた俺は友達と遊ぶことが出来なかった。そんな俺がゲームや漫画にはまったのは当然と言えるだろう。

中学にはわざわざ全寮制の所を選んで行ったが、結局俺はゲームをして過ごしていた。

特にゲームの中でもはまったのはRPGだ。

主人公を自由に育てていくことで、おそらく俺は自由な進路が手に

入らない自分を慰めていたんだろう。

しかしそんな理由を抜きにしてもRPGはおもしろかった。

ドラ○エ、F○、ウィザー○リィ、テ○ルズ、その他色々……。

とにかく俺にとってゲーム、取り分けRPGは俺の18年余りの人生に空気のように存在していた。

そんな人生を歩んで来たもんだから、ゲームの中に入りたいなんて妄想をしたことも一度や二度ではなかった。

そんな俺だが、何度考えても今いる状況が理解出来なかった。

「あっ？」

始めに出たのはそんな声だ。

部屋に入り、RPG『ギヤスパルクの復活』をプレイし始めた。まさにその瞬間、俺は見慣れない草原に立っていた。

（落ちて着け、とりあえず冷静になって周りを見るんだ）

そう思った俺はまず周りを見渡してみた。

アフリカのサバンナのように広がる草原。

青い空に流れる白い雲。そして空を跳ぶ紅い鳥。

………鳥？

明らかに元の世界には有り得ない光景だ。

何故ならあんなに大きな紅い鳥は存在しない。

そこまで考えた所で俺はある事実に気がついた。

「この光景……まさか!？」

しかし周りを見ればみるほど馬鹿馬鹿しい事実は現実味を帯びてきた。

そこまで考えて俺は現実を受け入れることにした

「まさか……ここはエターナルなのか？」

エターナル それはギヤスパルクの復活の舞台となる世界の名前である。

つまり俺はゲームの中に入るといふ夢を叶えてしまったようなのだ。

「なら……俺の記憶が正しいならここはアルダ村近くの平原の筈だよな……なら、とりあえず村に行って情報収集でもするか」

そう決めた俺はエターナルでの生活の第一歩を踏み出した。

主人公 プロフィール

聖護院 大和 （しょうごいん やまと）

18歳、高校三年生。

大学に合格し、暇を持て余していたところ、『ギヤスパルクの復活』を始める。原作の勇吾や翔と違い学校は自由登校だったため通っておらず、二人の三倍近いプレイ時間を誇る。

職業は大地神グランドから祝福されたドラゴンナイト

攻撃力に関してはゴースナイトに少し劣るが、鎧を装備でき、また魔法を使うことが出来る。

万能型の職業である。ちなみにドラゴンナイトになるにはファイターのままでドラゴンを三百体以上倒す必要がある。

ウォーザードとゴースナイトのいいところ取りのような職業だが唯一LUKつまり幸運が二桁と異様に低い為、即死魔法や確率魔法に弱い。がDEXやWISが高いために、命中率についてはカバーできている。

ヤマト

R A C E	S E X	A G E	L U K	W I S	I N T	A G I	D E X	V I T	S T R	C l a s s	M P	H P	L V
人間	男性	18	96	478	512	687	624	523	1242	ドラゴンナイト	972	1863	96

ステータスはロープレ風です対応表はこちらで

STR 腕力
DEX 器用さ
VIT 体力
AGI 素早さ
INT 知力
WIS 精神力
LUK 幸運度

原作の二年前からスタートしてある程度したら原作と合流します。

第1話

初戦闘そしてアルダ村（前書き）

第1話です

第1話 初戦闘そしてアルダ村

早速アルダ村に向かって歩きだした俺だが、まだここがゲームの世界であることを疑っていた。

しかしこの風景は、明らかにゲームと同じである

どうしたものか……そんなことを考えながら歩いていると……

モンスターが現れた。

「ジャイアントアント……か」

と、ここまで呟いて俺は気付いた。

「俺って何レベルなんだ？」

モンスターが現れたことで疑いの気持ちは払拭された。しかしこの状況はまずい。そもそもリセットボタンは存在しない。つまり……

「死んだら終わり……か」

しかし、そこまでわかっていながら何故か俺は冷静だった。

死ぬかもしれない状況、普通は怯えるべきなのだろう、しかし俺の気持ちはむしろ高揚していた。

そのまま呪文を唱える

「ファイヤーボール」

瞬間、俺の掌からスイカ大の炎球が飛び出してジャイアントアントを直撃した。

一瞬でジャイアントアントのHPが0になる。

今気付いたが、ゲームと同じでHPバーもあるようだ。

「レベル1からかと思ったが……どうやら大丈夫みたいだな」

そう思ってジャイアントアントがいた場所を見るとゴールドが落ちていた

「……これもゲームと同じか」

そう思いながら何気なく試してみると……

「おっと！」

目の前にステータスウィンドウが開かれた。

「おおっ！　最後にセーブした時と同じだな、ファイヤーボールが使える訳だ……」

その後よく見てみると、装備とゴールドだけが無くなっていた。

「けど……この辺りのモンスターなら素手でも楽勝だな」

そう呟いた俺は、ゲームの中に入れたという高揚感に浸りながらアルダ村へ足を進めた。

〽2時間後

「やっと着いたか……」

俺は村の門を見上げながらぼやいた。

あれからジャイアントアントを何体か倒しながら歩いて来たが、正直ここまで遠いとは思わなかった……

「ゲームの主人公はすげえな」

画面の向こうで主人公はこんな苦勞をしていたのだろうか……

そんな事を思いながら村に入ると周りの人間から一斉に視線を向けられた

そんな視線を無視して、とりあえず俺は記憶を頼りに、風神ファドラの神殿に向かうことにした。

落ち着かない。何せ村の通りを歩くと村人が道を開けるし、周りからは好奇の目で見られているから当然と言えば当然だろう。

「まあ、制服に裸足じゃあ怪しいよな」

今の自分の格好を考えれば自明の理である。

そんな視線を受け流して歩くこと5分。ようやく神殿が見えてきた。

「……でけえな」

ゲームで見慣れたと思っていたんだが……実際に見るとまた違った迫力があつた。

「さて、とりあえず神殿に礼拝するか」

寺の子供の癖にと思うかもしれないが、俺は仏教、キリスト、イスラム問わず、祈れるものには祈る主義である。

ギイイイイッ

重々しい音と共に扉が開く。中に入ると風神ファドラの像が迎えてくれた

「田舎の村にしてはえらく立派だな……」

俺がそう呟くと、いきなり声をかけられた。

「そうでしょう、何せこの村唯一の自慢ですからな」

声のした方を見ると風神ファドラの神官服を来たおっさんがいた。

「でしょうね、この神殿はどのようなゆかりがあつてこの地に？」

敵意はない、そう判断した俺はとりあえず話をてみることにした。

「昔、まだサルドルバ王国があつたころ、初代獅子王陛下が村に立ち寄られてこの神殿を築いたのです。このような辺境の地にも風神ファドラの信仰が行き渡るようにと。もう二百年近くも前のことです。以来私の家の者が神官職を務めてまいりました」

そのおっさんは、誇らしげに語った。

頭上にはオランドゥと表示されている。

「そうですか、ところで自己紹介が遅れました。俺はヤマトと言います。しがない冒険者です、思いもかけず立派な神殿に思わず立ち寄りました」

「これはご丁寧に、私はオランドゥ、このアルダ村で神官を務め、また村長を兼任している者です。ところで今、冒険者とおっしゃいましたか？」

「ええ、それがどうかしましたか？」

「いえ、それならば少しお話しがございますので祈りを捧げられた後、私の家に来ていただけませんか？」

クエストか？　とにかく何らかのイベントのようだ。　そう判断した俺は承諾の返事をした。

「ええ、構いませんよ」

そして5分後、案内された俺はオランドウさんの家で話しを聞いていた。

「実は話しというのは貴方に仕事の依頼がありまして……」

案の定、クエストの依頼だったようだ。

「わかりました。とりあえず伺いましょう」

俺がそう返事するとオランドウさんは話し始めた。

「実は、最近村の近くにコボルトが住み着きまして、困っておるのです」

「成る程、つまり…？」

「ええ、御依頼したい仕事というのはコボルトの退治なのです」

まあ、予想通りだ。

「成る程、引き受けましょう。とりあえず数と報酬を教えてくださいだきましようか？」

「わかりました。危険なのでよくわからないのですが、コボルトは約20匹ほど。そして報酬ですが……一万Gでいかがでしょう？」

ふむ、つまりコボルト一匹につき500Gか……まあ、打倒かな。

「わかりました、引き受けましょう。では今から行くとします」

「え……。しかし直に陽が落ちますし、明日にされては？」

言われて外を見ると既に太陽が傾いていた。

「では、お言葉に甘えまして」

こうして、俺の波乱に満ちた一日は終わった。

ちなみに夕食をご馳走になったのだが、オランドウさんの娘二人がえらく美人で驚いた。血の繋がりに、DNAを疑ったね。

それから色々レベルや靴、服装について聞かれたが、何とかごま

かすことができた。

用語説明

アルダ村『ギヤスパルクの復活』の初期に訪れる村。風神ファドラの神殿がある。まわりにはジャイアントアントなどドラクエでいうスライムのモンスターが棲息すり比較的安全な村。

ジャイアントアント

その名の通り、でかい蟻のモンスター 弱いわりにゴールドを持っている為に、序盤にゴールドを稼ぐのに適している。

コボルト

これまたそのままの子鬼のモンスター、ジャイアントアントより強く、レベルは十ぐらいないと倒すのは難しい。

ファイヤーボール

火の初級呪文 威力はそれほど高くないが、ジャイアントアントくらいは一撃。またINTインテリジェンスの高いヤマトが使うと中級呪文近い威力がある。

第二話 コボルト退治（前書き）

多少原作とキャラが違うかもしれませんが

第二話 コボルト退治

「ん、朝か……」

昨日、オランダウさんの家に泊めて貰った大和はいつもの習慣からか早くに目が覚めた。腕時計（身につけていたため持っている）を見ると朝の5時、起きるには少々早いだろう。

そう思ったヤマトだが、既に村では人が働いていた

流石は農村……そんなことを思いながら部屋を出て一階（寝室は二階にあった）に下りると朝食の準備をしていたレヴィアと出会った。

とりあえず挨拶しておく

「おはよう、レヴィア」

「あ、ヤマトさん。おはようございます」

俺が挨拶すると彼女は綺麗な笑顔で答えてくれた

ちなみに彼女はオランダウさんの二人娘の姉の方で、亡くなった母親の代わりに家事全般をこなしているそうだ。

歳は14だそうだが、なかなか将来美人になりそうだ。ちなみにオランダウさんいわく、娘二人は奥さん似らしい。

「おや、ヤマトさん。おはようございます」

「ああ、オランドゥさん おはようございます」

と、そこに朝の祈りを捧げて来たらしいオランドゥさんが合流した。

「おはようございますお父様、朝ごはんはもう少し待って下さい」

「おお、すまんなレヴィア」

「お父様はイシユラを起こしてきてくれませんか？」

「わかった」

ふむ、どうやら俺に出来ることはないみたいだな。適当に能力の確認でもするか。

そう考えたヤマトは庭に出て能力の確認を始めた

ヤマトが確認しようとしている能力とは要は身体能力の事である。

今の俺はSTRからAGIまでかなり高いからそこそ動ける筈だよな。

そう考えたヤマトはまず軽く飛んでみることにした。

「よっ！……………」

しかし跳んですぐに間抜けな声をあげてしまう。何故なら……

「跳びすぎだろ！？」

5メートル近く跳んでいたからだ。

「しかも着地しても痛くないし」

しかしその後ヤマトはひどく驚くことになる。

「ぬおっ！」

全力で走れば残像が生まれ

「どわっ！」

樹を殴れば折れるのではなく砕けた。

その後も試行錯誤した結果。

ド○ゴンボ○ルの幼少時代の孫悟空並の身体能力があることがわかった。

「チートだな……」

画面ごしでは判らないキャラの強さを目の当たりにして少し引いたヤマトだった。

「ヤマトさん、ご飯ですけど」

「ああ、すまん。今行くよレヴィア」

呼ばれたヤマトは朝食の為、家に入った。

「では、朝食も頂いたし、早速コボルト退治に行くとするか」

朝食を終えたヤマトがそう呟くと向かい側にいた少女が騒ぎ出した。

「え！　じゃあ私も行きたいです！」

そう言っただけで元氣よく手を挙げたのはオランドウさんの娘、イシユラ・アローネだ。姉のレヴィアとは対照的でかなり活発な性格をしている。

「こらイシユラ、お前みたいなのレベル5にも満たないような村娘が、ヤマトさんについて行って何が出来ると言うのだ！」

オランドウさんが叱り付ける。

「でもでも、あたしも行きたいんだもん！　お願いですヤマトさんが、何でもするから連れて行って下さい！」

必死な顔で頼まれたヤマトは断り切れず……

「あ、いや俺は構わないが……オランドウさんは反対のようだぞ？」

思わず肯定ぎみな返事をしてしまった。

「ほらっ！ ヤマトさんはいって、言ってるんだからあたしは行くよ！」

「こらイシュラ！あまりお父様とヤマトさんを困らせないように！」

それを聞いたイシュラが我が意を得たとばかりにまくし立てたが、レヴィアに一喝されて黙り込んだ。

「ふーむ、まあ危ないからな、じゃあオランドウさん、俺は行きま
す」

「わかりました、吉報を待っております」

「ええ、ではレヴィアご馳走さま」

そう言うときヤマトは森に向かった。

「さて、どこにいるのかな？」

アルダ村の側の森に入ったヤマトだったが、コボルトがどこにいるのか分かる筈もなく、あてもなく森をさ迷っていた。

「ゲームじゃ勝手にエンカウントするんだけどな……」

そう言いながらどんどん森の奥に入って行くと…

「お?」

目の前にコボルトが現れた。

「ビンゴッ!」

森の奥にいけば会えるだろうという目論みが当たって思わず指を鳴らしたヤマトだが、周りを見て目を見開いた。

「おおっとと、こいつは驚いた」

何故ならヤマトの周りには20近いコボルトがいたからだ。

「囲まれたって訳ね……たかがモンスターの癖にやるじゃない!」

そう呟いたヤマトだったが次の瞬間には攻撃に移っていた。

『フレイムストライク』

背後のコボルトに向かって牽制で魔法を放つと、残像を作りながら目の前のコボルトに突っ込んだ

「ふっ!」

とりあえず一匹目を蹴ると吹っ飛んで行き、樹に当たるとHPを消費させた。

続いて二匹目を蹴り飛ばしたところでコボルトが両脇から飛び掛かってきた。

流石はモンスター、しかもコボルトの中では強いのかかなり速かった。

「はっ！」

しかしヤマトが突き出した両の拳が顔を撃ち抜く方が速かった。

そのまま前にいたコボルトを全滅させたヤマトは振り向きざまに呪文を唱えた。

『ブリザード』

するとヤマトの手から吹雪が巻き起こり、最初のフレイムストライクから逃れ、飛び掛かって来ていたコボルトを吹き飛ばす。

「……終わりか」

後に残ったのは凍ったコボルトの氷象だけだった

わずか30秒程でコボルトを全滅させたヤマトはゴールドを拾うと村に帰ろうとした。

「きゃあああ！」

と、そこで悲鳴が響いた

慌てて悲鳴がした所に向かうとイシュラがジャイアントアントに囲まれていた。

俺の後を追って来たのか！

どうやら、オランドウさんとレヴィアの二人から許可を貰えなかったイシュラは独断で後を追って来たらしい。

「仕方ない…… イシュラ！伏せろ！」

全力で走りながらそう叫ぶと声が届いたのかイシュラは地面に伏せた。

「よし！消えうせるがいい！『ライトニングストーム』！」

ヤマトが呪文を唱えると上空に雷雲が発生。雷がジャイアントアントだけを標的に降り注いだ。

「イシュラ！無事か？」

ジャイアントアントを倒したのを確認すると、ヤマトは慌ててイシュラを抱え起こした。

「ん………」

「気を失ってるだけか………」

ホッと溜息をつくど、ヤマトはオランダウさんの家に戻った。

「本当になんと御礼を言ったらいいのか……」

目の前ではオランダウさんが何度も頭を下げている。

「いえ、気にしないで下さい。イシユラがついてきてるのに気付かなかった俺も悪いですから」

俺がそう言うど、オランダウさんはとんでもないと首を振った。

「まあ、幸い大事には至らなくてよかったじゃないですか、それにこれ以上頭を下げられても、反って辛いですから」

「そうですか……ヤマトさんがそこまでおっしゃるなら……」

「では、すみませんが報酬を……」

「あつと、これはうっかりしておりました。これが報酬です」

「ありがとうございます」

オランダウさんから手渡されたのは袋に入ったゴールドだった。

「よし、じゃあゴールドも頂いたのでこれで……」

そう言うと、ヤマトは立ち去ろうとしたが……

「お待ち下さい、せめてお礼もかねて一晩泊まって行かれては？」

オランドウさんに呼び止められた。

「ははっ、それはありがたいですが、先を急ぐのでこれで失礼します」

「しかし、それでは余りにも！」

「なら風の神に旅の無事でも祈って下さい」

そう告げるとヤマトはアルダ村を出た。

ヤマト

レベル96

装備

頭 なし

上 学生服上

下 学生服下

足 靴

アクセサリー マント

寺で育った為、かなり敬語を使用する。人助けをして当たり前という性格

アルダ村にて靴やマントを入手

第二話 コボルト退治（後書き）

『ライトニンストーム』……サンダーストームの進化版、ただし風属性が無い分威力と効果範囲は狭いがピンポイントの攻撃が可能

フレイムストライク

火の中級魔法ファイヤーボールの強化版

ブリザード

氷の上級呪文、広範囲に吹雪を起こす。たいていの雑魚なら瞬殺

第3話 メルダの街（前書き）

遅くなりました。この連休でいけるとここまでいきます。

第3話 メルダの街

「ふうっ、やっと着いたか……」

アルダ村を出たヤマトは隣の街メルダに着いていた。

「オランダウさんに地図を貰えて助かったけど、馬が要るな……」

徒歩で移動しているので、ゲームと違い、ヤマトも人間の為、疲労していた。

「怠いなあ……。とにかく宿探すか」

そう決めて歩き出したヤマトだが、流石は剣と魔法のファンタジーな世界、そこら中に珍しい物が広がっていて、なかなか足が進まない。

「あれは!?!」

広がるファンタジー世界ならではの町並みを眺めていたヤマトだったが、武器マークの店を見つけた瞬間、思わず駆け出していた。

「武器の店!、よっしゃあ、ようやく剣を買えるぜ!」

ヤマトは勇んで店に向かった。

「いらっしやい! ほう、若いねえ」

ヤマトが店に入ると奥のカウンターから声が飛んできた。

髭面の大男――『ザッカンラン』とキャラクター名が表示されている――が愛想の良い笑みを浮かべている。店内には大小様々な刃物がずらりと並んでいた。

「店主、ちょっと尋ねたいんだが？」

「なんだね？ 値段なら相談に乗るよ、まあ限度はあるが」

「なら聞きたいんだが……刀はあるか？」

「刀？ ああ、忍者刀系統の武器かい？」

「ああ、それだ」

「それなら残念ながら扱ってないな」

「そうか、ならこの店で1番いい剣を頼む」

「わかった、剣だけでいいのかい？ うちは一応防具も扱ってるよ？」

「しかし、その服だけじゃあ……」

「大丈夫だ、問題ない」

「………わかった、ちょっと待ちな」

そう言って一度引っ込むと刀身が赤みがかかった剣を持ってきた。

「こいつはドワーフから仕入れたもんで、火龍の血をかけて鍛えてあるから炎属性がついている。」

攻撃力は62だ。銘はレッドソード」

ヤマトは黙って受け取ると素振りを試みた。

「うん、悪くはないな。店主、これはいくらだ？」

「本当は十万といたいが、あんた気に入ったから八万Gでいいよ」

「むっ、そうか……」

ヤマトの所持金はアルダ村で貰った報酬とコボルトから稼いだものを合わせて七万Gだ。一万G足りない」

「済まない、今の持ち合わせじゃ足りないので明日買いにくる、それまで取り置きしてくれないか？」

「なんだ、いくら足りないんだい？」

「一万Gほどだ」

「なるほど、それなら残り一万Gは後で構わんよ」

「そうか？ それは助かる。俺は憩という宿屋に泊まっているので、何かあったら呼んでくれ」

「あいよ、それじゃあ剣だ、鞘もサービスしておこう」

「悪いな、店主」

「いいってことよ、また来てくんない！」

「明日ちゃんと金は払いにくるさ」

「ははっ！ そうだったなそれじゃあな」

ヤマトは店を後にした。

〓2時間後

「あゝ、疲れた……」

ヤマトは宿のベッドに倒れていた。

あのあと、剣に全財産を使ったヤマトは速攻でモンスターを倒しに出て宿代を稼ぐと、街の店をひやかして周り、いましがた宿に入っただけだった。

「何かクエストでもしねえとなあ」

かなりモンスターを倒したが、この辺りのモンスターが落とすゴールドは少なく、ヤマトが稼いだのは4000Gしかない、宿代に5

OG払った為に明日剣の代金を払うにはかなり頑張らないといけない

「あゝ、馬を買う金もいるし、しばらくここでクエスト受けるか」

そう決めるとヤマトは眠りに落ちた。

「ドンッ！ドンッ！」

しかし午後6時、扉を叩く音でヤマトの安眠は妨害された。

「……誰だよ」

半分寝ぼけなまこでいたヤマトだが扉を開けてそこにいた男を見て
眼が醒めた。

「あんた昼間の……」

そこにいたのは血相を変えた武器屋の店主、ザッカンランだった。

誘拐とゴロツキとヤマト無双（前書き）

投稿です、少し手直しするかもしれません。

誘拐とゴロツキとヤマト無双

「一体どうしたんだ？」

扉を開けてザッカンランを招き入れながら、ヤマトは興奮した様子だったたので落ち着かせながら尋ねた。

「ああ、聞いてくれ、実は……」

そう言って、ザッカンランは話し始めた。

実は彼には一人娘がいるのだが、ヤマトが去った後、その娘が運悪く店の前でゴロツキに絡まれてしまった。慌てて助けに入ったのだが、殴り飛ばされてしまい、立ち上がろうとしている内に娘は連れ去られてしまった。

その時ゴロツキ二人に、娘を返して欲しいや五十万Gを持って酔いどれ通りの太陽亭に来说われた。そこで金策に走ったが、全然足りないのではなんとかしてくれないか、ということだった。

「成る程、つまり娘さんを助けて欲しいってわけか」

「ああ、そうだ。頼む、勿論剣の代金はただでいいし、追加報酬も出すから助けてくれないか？」

必死な形相で頼んでくる

「別にいいが……どうして俺なんだ？」

「あんた、見た感じただ者じゃなさそうだからな、何より高レベルの冒険者の知り合いがいなかったのがでかいが……」

「成る程、わかった。剣の代金を無料にしてくれるなら喜んで引き受けるさ、で？ 娘さんの名前は？」

「フィーア、あんたと同じ年頃だ、髪の色はカミさんと同じ金色だ」

「わかった、案内してくれ」

ヤマトはレッドソードを装備しながらそう言った。

ザッカンランに案内されて街の北側に向かうと途中には大小何軒もの酒場が軒をつらねており、ヤマトは新宿の歌舞伎町をイメージした。

「ここだ」

そう言われて前を見ると、太陽の看板が出ているのが見えた。

「太陽……。太陽亭か、そのままだな」

そう呟くとザッカンランにこの場で待つように指示をしてヤマトは

ドアを開けた。

「うわっ、やばそうな店」

入るなりヤマトはつぶやいた。 明るいイメージの店名とは裏腹に、客層は見るからに危なそうな荒くれ者だらけ。店そのものも薄暗く、陰鬱な気配に満ちていた。

「なんだオイ、ここはガキの来るところじゃねえぞ」

入口のテーブルにいたスキンヘッドの男が睨みを聞かせた。

しかし、それを無視してヤマトは店の奥に向かった。

カウンターに空いた席を見つけて腰掛ける。

「マスター、少し尋ねたいんだが」

「注文を言いな。話しはそれからだ」

頬のこけたバーテンは無愛想に言った。

「では適当に何か一つ」

ヤマトが注文するとー

「おいガキ！飲み物なら家に返ってママに飲ませて貰いな！」

さっきのスキンヘッドが怒鳴り、下卑た笑いが巻き起こった。

なんだ、このベタなシチュエーションは。西部劇もの定番中の定番、ベタすぎて笑える展開ってか？

そう思ったヤマトは振り返って人さし指を突き付け、

「おいハゲ、黙ってろ」

そう言ってやった。

「それでマスター、尋ねたいことというのは…」

「おいコラァ！　今、なんて言いやがった！　もういっぺん言ってみやがれ！」

スキンヘッドは椅子を蹴って立ち上がり、足音荒くヤマトのそばへやってきた。

ヤマトは無言で立ち上がると、このわかりやすすぎる悪役を一瞥した。

キャラクター名は『ガンダダ』と表示されている。

「やめておけ。怪我をさせたくはない」

ヤマトのセリフに酒場は死体置場のごとく静まり返り、スキンヘッドは茹で上がったタコのように顔を紅潮させた。

「なんだと貴様ァ！　LV27のおれ様にケンカ売るたァ、いい度胸じゃねえか！　その細首、ぶった切ってくれるわ！」

スキンヘッドは腰に吊した斧を振るった。ヤマトはレッドソード

を抜き払った。

カイイイイイイン……。

金属の打ち合う甲高い音色が鳴った。ヤマトの一撃でスキンヘッドの斧は弾き飛ばされ、天井に突き刺さった。スキンヘッドは腕が痺れてしまったらしく、青い顔で利き腕を胸に抱いた。

ヤマトはそれを一瞥するとマスターに向き直った。

「マスター。それでだが」

「はい！　なんでしょう！　私の知っていることでしたらなんでもお答えしますが」

……マスター。あんた、態度が変わりすぎだ。

「娘を捜しているんだ。武器屋のザツカンランの娘さんで、フィーアていう……」

ヤマトは事情を説明した

「ああ、それでしたら、今の男が……」

マスターに言われて振り向くとスキンヘッドの男がこそこそと逃げようとしていた。

「待て、貴様が犯人か？」

ヤマトはスキンヘッドの男ガンダダの前に立ち塞がり詰問した。

「し、知らねえよ」

「貴様……まだ白を切るか？」

そう言ってヤマトは目の前にあったテーブルをレッドソードで細切れにした。

「言え、さもなくば次は貴様の番だ」

そう脅すと、男はマスターに助けを求めた。

「成る程、この店ぐるみって訳か。つまりこの店は闇ギルドの依頼の紹介所ってところか」

ヤマトがそう指摘するとマスターが手を挙げた。

ガタンッ！ガタンッ！

すると酒場にいた全員が武器を抜いて立ち上がった。

「ほう……いい度胸だ」

「悪いが店の秘密を知ったからにゃ、生かして帰せねえんでね、旦那、悪いが死んで貰うぜ！」

マスターが合図すると一斉にかかってきた。

「はあっ！」

ヤマトは気合い一閃、レッドソードで纏めて正面にいた五人を吹き飛ばす

さらにそのままの勢いで廻し蹴りを放つと、後ろから迫っていた男に命中、男は周りも巻き込んで吹き飛んだ。

するとそこに両側から男が剣を振り下ろしてきた、元は腕利きの傭兵なのだろう、踏み込みも十分過ぎる程速い。

「ガアッ!？」

しかし二人が斬ったのはヤマトの残像だった、次の瞬間、ヤマトのレッドソードが一閃、二人の剣を弾き飛ばすとそのまま、吹き飛ばした。

『サンダー』

ヤマトが手加減した雷撃を放つと、吹き飛んだ連中は気絶、最後に大男が振るった斧を屈んで避けるとそのまま拳を叩き込んだ。

これで相手は全滅した。

「あ、うああ……………」

意味不明な声を上げるマスターに剣を突き付ける。

「最後通牒だ。娘を出せ」

マスターはがっくりと膝を着いた。

「お父さん！」

「フイーア！」

数分後、酒場の二階に捕らえられていた娘を助け出すと、感動の親子の再開が待っていた。

酒場のマスターを吊してゴールドを手に入れたので、ヤマトはご機嫌だった。

実にいい気分で、それを眺めていると、親子が揃って頭を下げて来た。

「本当になんと御礼を言ったらいいか……」

「それはいいさ、それより剣の代金は無料でいいんだよね？ならそれで十分だ」

「勿論！　しかし御礼をさせてくれ、このままじゃ、気持ち収まらん！」

「そうか、じゃ、夕飯食わしてくれ、腹が減った」

「わかった、是非家に来てくれ」

こうして、ヤマトの初クエストは終了した。

余談だが、この事件は裏の世界に響き渡り、闇ギルドではしばらくヤマトの名前が恐怖の代名詞となった。

初クエスト終了、

称号　鮮血の剣士、ギルドキラーをゲット！

誘拐とゴロツキとヤマト無双（後書き）

出して欲しいキャラ、職業クラスがあればご意見、要望下さい

歓迎と道連れと出発（前書き）

微妙です、

歓迎と道連れと出発

「美味しいですねこれは」

「そう言っで戴けると作った甲斐があります」

「さあ、どんどん食べてくれ！　こっちもお勧めだよ！」

あの後、日が暮れて暗くなり、お腹が空いていたヤマトはザッカンランに是非御礼がしたいと誘われたため、自宅に招かれて夕食を馳走されていた。

「あ、これも上手いな」

「ああ、それはメルダの町の名物料理で……」

歓談しながら食事を進める。
流石は異世界、食材も変わった物が使っており、なかなか楽しむことができた。

「ふー、美味かった。ご馳走になりました、それじゃ俺はここで」

夕食を戴き終わったヤマトは固辞して、宿に戻ろうとしたが、ザッカンランと娘のフィーアに止められてしまった。

「待ってくれ！ 実は頼みがあるんだ」

「はい、どうしてもお話したいことが」

「お願いします！どうか！」

真剣な三つの顔に見つめられたヤマトは話を聞かざるをえなかった。

「実は最近、ああいう手合いが増えていてな……」

苦々しい顔をしてザッカンランが話す事を纏めると以下のようになる。

最近メルダの町に今日のような手合いが増えているという、勿論酒場近辺に近寄らず、かつ気をつけていけばトラブルに巻き込まれることはないのだが……ザッカンラン家は武器屋なんて商売の為、

冒険者のような連中は武器を買いにザッカンラン家に来るからどうしてもその娘であるフィーアは目につきやすくなる

何よりあの美貌である。

ザッカンランの娘であることが信じられないくらい美人なフィーアは冒険者に絡まれ安くなっていた。勿論ザッカンランが何とかしていたが、今日の出来事から限界を感じたらしい。

そこで……

「ヤマト君にフィーアを連れて行って貰いたいんだよ」

つまり本題はこうだった

最近、町の治安が悪い

商売柄、がらの悪い連中も来る。

フィーアが目をつけられる。

しばらく他の町に出すか

フィーアに相談、

娘乗り気

ヤマトが来る。

こいつに頼むか……

誘拐発生

ヤマトが助ける

よし、決定！

という訳だ。

「私も、冒険者には憧れていて、ただの町娘よりは強いですよ」

そう言ってフィーアがステータスウィンドウを開くとLV14と表示されていた。普通の一般人がLV5前だと考えると高レベルだろう。

しかしヤマトとしてはイマイチ乗り気になれない

「しかし、言っては悪いが足手まといだ。悪いが……」

断らせて貰う。

と言おうとした所でザッカンランがニヤリとした

「まあまあ、ヤマト君。確かに君はそう思うかもしれないがフィーアがいると何かと便利だよ？」

「便利……？」

「ああ、フィーアは料理が得意だからね。旅の途中でも美味しい食事が食べられるし、近辺には詳しいから道案内にもなるから道連れには最適だよ？ それにフィーアを連れて行ってくれるのなら馬車

と馬を用立てようじゃないか、このままだと野宿だろう？それに邪魔だと思ったら置いていって貰って構わないよ」

一気にここまでまくし立てられて圧倒されたヤマトは思わず頷いてしまった。

喜ぶ親子を見て自らの失敗に気付いたが、よく考えたら現代っ子の自分が野宿など出来るはずもないと気が付き、まあいいかと容認することにした

旅の仲間をゲット！

キャラクターステータス

ファイア

LV14

Class 町娘

L U K 9 8	W I S 7 2	I N T 8 6	A G I 1 1 1	D E X 5 8	V I T 4 8	S T R 5 2	M P 7 3	H P 1 8 4	R A C 人 間	S E X 女 性	A G E 1 7
-----------------------	-----------------------	-----------------------	----------------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------	-----------------------

旅路（前書き）

なんとか投稿です。受験だりい

旅路

「では、お父さん、お母さん、行ってきます」

「ああ、身体に気をつけてるんだぞ」

「ええ、いつでも帰って来ていいから、とにかく身体だけは大事に
しなさい」

あれから三日、ある程度はGを稼ぎ、装備を整えたヤマトは、ザッ
カンランから約束通り受けとった馬車で出発しようとしていたが、
町を出るところで、同行することになったザッカンランの娘。

フィーアの別れを眺めていた。

家族……………か。

そういえば随分と会っていないなど今更ながらに思うヤマトであっ
たが、取り立てて郷愁の念に駆られることはなかった。

「よし、出発だ！」

別れの挨拶が済んだのか、フィーアが馬車に乗り込んだのを確認す
ると、ヤマトは馬車を出した。

町の門では衛兵の他に何人も町の人が集まっていた。

……………どうやらフィーアはかなり人気者だったようだ。

こうして盛大に見送られながら町を出たのが二日前。

「……だるいな」

メルダの町を出て二日。

ヤマトはとりあえず、現在いるサルドルバ王国の首都、王都ガライヤに向かっていた。

フィーアがいるのに加えてゲームの知識もあるために、道には迷わないのだが……

（想像以上に道がきついな……）

ゲーム画面で見た地図以上に町から町への移動は時間がかかった。

そして何より……

（道が舗装されてないからな、揺れが酷い）

馬車に乗っていると微妙に揺れるのだがそのせいで尻が痛い。

つくづく自分が現代っ子であることを思い知ったが、慣れていくしかないと開き直るしかなかった。

「おまたせヤマトさん、キノコシチューです」

そんなことを思っていると、フィーアが夕食を作って来た。

正直、フィアがいなければ自分はもうどうしていただろうと寒気がしたヤマトだった。

「美味かったよ、ごちそうさん」

「いえいえ、お粗末様です」

食後、ヤマトとフィアはかなり碎けて話していた。二日間いた間、互いに話し相手もおらず退屈していたため、必然的に多く話した結果だった。

「それより、ガライヤに行つてどうするの？」

「んー、確か武闘大会があるはずだよな？」

「ええ、確か騎士登用の大会だったはずだけど」

「まずはそれに出ようかと思う。それとフィアのクラスチェンジかな」

「え？ クラスチェンジ？」

「ああ、何をしていたのか、フィアはレベル14だからな、王都に着くまでに15にしてクラスチェンジするぞ、このままじゃ最低身を守ることすらできないからな」

「ええ！？ クラスチェンジ！？」

「そうだけど……何でそんなに驚いてるんだ？」

「いや、まさか自分がクラスチェンジする機会が来るとは思わなかったからつい……」

「へー、やっぱり普通はしないんだな」

「ええ、私は衛兵の人達についてモンスターを倒していたからレベルが高いけど、普通は5くらいだから……」

「衛兵についてモンスターを倒して回るとは……そうとうお転婆だな」

「し、仕方ないじゃない！町で遊ぶと狭いんだから」

「成る程、町で遊ぶのでは満足出来なかったと……男の子か」

「失礼な！私は女です！」

と、親交を深めるヤマトとフィーアだった。

翌朝

「王都に着くまでにレベルを上げるからな、今日はモンスターを倒す」

翌朝、ヤマトは朝食を済ませると馬車を操りながら隣にいるフィアに話しかけていた。

「え？ 昨日の話本気だったの？」

「ああ、言っただろ？ 『足手まといは要らない』 って、せめて15にはなって貰うぞ」

「ええ！？ でもそんな」

「嫌ならメルダの町に戻すぞ、幸いまだ間に合うから「さあ！ やるわよ！」……単純な奴」

フィアのやる気のある？ 返事を聞いたヤマトは馬車を沼地に向けた。

「……………なに？ これ」

「毒沼だ。 まあ、基本だな」

3時間後、二人は沼地に着いていたが、露骨にフィアの顔は引きつっていたし、ヤマトも顔には出さないが、内心でゲームとリアルの落差に引いていた。

見れば馬車が通れるぎりぎりの幅の道が通っている。

「フィーア、馬車を降りろ、モンスターを片付けるぞ」

ヤマトがそう言うのと、フィーアはブンブンと首を振った。

「無理、絶対が無理。見た目が既にアウトよ」

そう言って梃でも動こうとしない。メルダの町に戻すと脅しても平然と聞き流す程だ。

「仕方ない……か」

ヤマトは荒療治を行うことにした。

1、馬車から馬を外す。

2、荷物を下ろす

3、石を投げてモンスターを呼ぶ。

すると石が当たったナメクジのモンスター、ポイズンスラッグが迫って来た。同じ要領でもう数匹呼ぶ。

するとフィーアはすっかりポイズンスラッグに囲まれている。

逃げようにも逃げ場はないし、馬車は動かない。

進退窮まったフィーアがとれるのは、ただやけくそ気味にポイズンスラッグに突っ込むことだけだった。

「よしよし、ちゃんと闘ってるな」

ヤマトはフィーアが戦っているところを少し離れて眺めていた。

いざとなったら助ける構えをとっているのはポイズンスラッグが麻痺毒とダメージ毒を持っているからである。

それに加えてもう一つあったが……

ピロピロピロリローン！

フィーアが三分の二ぐらいのポイズンスラッグを倒したところで、LVUPを知らせる軽快な音が鳴り響き、フィーアがこちらを向いて叫んだ。

「上がった！ レベル上がったからもういいでしょ！？」

「ああ、お疲れさん。後は俺がやろう」

そう言ってヤマトが一步踏み出した瞬間。

「っっ！」

突然、沼の水面に大きな泡がゴボリと浮き上がった。もしか、の思いでヤマトはレッドソードを抜いた。

ゴボッ、ゴボッ、と音を立て、次々に大きな泡が浮いてくる。

キヤアアアアア！

フィーアが悲鳴を上げた

信じがたいほど大きい、ナメクジというよりむしろ怪獣と呼ぶべき存在が、水面に頭をぬつと突き出していた。その目玉はフィーアを見つめていた。

「そいつから離れろ！」

ヤマトは急いでさげんだが、命じるまでもなくフィーアはこちらに走り出していた。

オールドスラッグがずるりと沼から抜け出す。

明らかになった全身像は家程もある。

「ライトニング！」

ヤマトは呪文を唱えて牽制した。

呪文が命中すると、HPが減り、怪物はこちらを向いた。

「来い！」

ヤマトは声をかけながらレッドソードを納めつつ走り、フィーアが十分離れたことを確認すると、オールドスラッグに切りかかった。

シュリン！

剣が鞘走る音と共に、オールドスラッグの身体に大穴が空く。

ドラゴンナイトの固有技

ヴォーパルストライクだ

単発の重攻撃で、技を放った後の隙はでかいが、まったくHPを消費しない優れた技である。

LV90になって現れたスキルだが、使い勝手がよく、ヤマトが好んでよく使う技である。

技を受けたオールドスラッグがのけ反る。しかし僅かにHPが残っている。

「ファイヤーボール！」

そこにヤマトは容赦なくファイヤーボールを叩き込んだ。

それでHPを示す赤いバーが真っ白になった。

ナメクジは液体化しながらゆっくり崩れ落ち、後にはきらきらと金色に光るGが残された。

「サンダーストーム！」

最後に範囲魔法を放って残ったポイズンスラッグを一掃する。

「さ、ゴールドを拾うぞ」

離れたところにいるフィーアに声をかけ、その日の戦闘は終了した。

王都 ガライヤ（前書き）

遅くなりました、すいません m () m

受験が終わったのでこれからは週一ペースで更新します。

王都 ガライヤ

「ふー、ようやく見えたな王都ガライヤ」

ヤマトは業者台に座りながら、見えてきた街を見て呟いた。

あの後、沼地を抜けて野営したヤマトとフィーアは王都ガライヤに向けて出発、夕方近くになってようやく辿り着いていた。

「ヤマトさん、急いだほうがいいですよ。日が暮れると門が閉まりますから」

「そうか、なら急ぐか」

そう言って心持ち馬車を急かしていると、王都の全貌が明らかになって来た。

「凄いな……周りを街ごと堀と城壁で囲んであるなんて……昔の小田原城のようだな」

「何ですか？ そのオダワラ城って？」

ヤマトの独り言を聞きつけたのか、馬車の中からフィーアが尋ねてきた。

「俺の居た国に北条氏って大名がいたんだが、その城が小田原城だったんだ。それで北条氏は最後の戦いは籠城することに決めて街ごと城壁で囲んだのさ。二、三年分の食糧を用意していたが、結局

は降伏したかな」

「へー、何ですか？」

「元々籠城っていうのは他所から援軍が来るのを前提でするべきなんだが、北条氏を攻めた豊臣秀吉ってのは天下統一まで後一歩って所だったからな。援軍が来る宛てもなく食糧が尽きるまで包囲されて終わりさ」

「そうなんですか」

「……お前理解してないだろう」

「（ギクッ）そ、そんな事ないですよ」

「まあいいさ、理解出来なくても仕方ない」

「な、何ですか！　まるで私が馬鹿みたいな言い方は！」

「いや、違う国の歴史だ。わからなくて当然だと思ってな」

「ならいいです」

と、そんな会話をしながら門に着く衛兵に呼び止められる。

「待て！　どこから来た！」

「メルダの町から」

門番は高飛車な態度だったが、ヤマトは落ち着いた声で応じた。

「積み荷はなんだ」

「商人ではないので、交易品は積んでいない。水や食料など、旅に必要な品だけだ」

「いちおう中を確認させてもらうぞ。モンスターの卵や幼獣などは持ち込み禁止なのでな」

「好きにしてくれ」

門番たちは場所の中をざっと確認すると、「通ってよし」と手を振った。

橋を渡って都に入るとー！。

「安いよ安いよー！ お買い得だよー！」

「おいそこ、どけ！ 邪魔だ！」

「さあさあ、ごらんください。これに取り出したるは、古、遙か東の地にて数奇な運命を経た魔法の珠でございます。この珠にまつわる数奇な運命とは、聞くも涙、語るも涙の物語……」

たくさんの人の喧騒がヤマト達の耳に飛び込んで来た。

「アルダ村やメルダの町と違ってかなり賑わっているな」

「ヤマトさん！ 凄いですね！」

フィーアが興奮したように声をかけてくる。

王都には一度も来たことがないらしいから仕方ないだろう。

しかしヤマトには困った問題が起きていた。

「しかし参ったな……宿はどこだ」

周りを見渡しながらかやマトはぼやく、人も建物も多い為、宿の場所の見当がつかないのだ。

「おっと、そこのお方！ 宿をお探しでしたら、ぜひ私どもの雲雀亭へどうぞ！ 厩舎もあるので、馬のお世話も万全でございます！」

突然、馬車の行く手を小男が遮ってさげんだ。

「案内してくれ」

渡りに船とばかりにヤマトはそう返事をした。

「ありがとうございます！ さ、こちらです、どうぞ！」

隣ではフィーアが少し怒っていた、どうやら驚かされたのだろう

大人しく小男の誘うほうへ馬首を巡らせると構えの大きな建物が見えてきた。

「いらっしゃいませ！ 馬車は私どものほうでお預かりいたししま

す。さ、お客様は帳場へどうぞ」

着くや否や、力仕事専門といった風体の男達が出てきて挨拶した。
どうやら中々良い宿のようだった。

「二人だ。広い部屋があればそれを頼む。多少高くてもいい」

帳場に立ったヤマトは気前良くいった。

「さようで。でしたら、二階にいいお部屋がございます。お料理、馬の世話などすべてこみで、一晚の料金は一千G、前払いとなっております」

主人は若いヤマトたちを値踏みするような目で眺めながら、しれっ
といった。

「ひと晩一千G!？」

隣でフィーアが驚愕の声を上げるのを無視してヤマトはお金を払っ
た。

「その部屋を頼む」

金を持ってなさそうだと踏んでいたのか、主人は一瞬^{えっ}といったげな
表情を見せた。

「ヤマトさん、いいんですか？」

「いいさ。馬車のせいで尻も痛いし、ケチらずにいいこう」

という訳でヤマト達は部屋へ案内された。

案内された部屋は天蓋つきベッドを始めとして豪華な調度品が並んでいてかなり立派だった。

「ヤマトさん、お城が見えますよ」

フィーアがはしゃいだ声を上げる。

ヤマトも内心驚いていた

（やはり、ゲームと違うな……）

「じきに日も暮れます。心づくしの料理をご用意させていただきます」

部屋に案内してくれたメイドがお辞儀をした。

「あっ！確かこの町の名物料理があった筈だから頼みます！」

フィーアが思いついたように頼んだ。

「かしこまりました。お部屋までお持ちしますので、このままお持ちください」

そのまま部屋で休んでいると、じきに幾人もの給仕が料理を運んできてテーブルに並べ始めた。

しばらく黙って食べていたが、食事をしながらヤマトが給仕に尋ね

た。

「そういえば、王都とはいえやけに人が多いな」

「はい、明後日に武闘大会が開かれるので」

「武闘大会？」

「はい、ガルガンシア王朝は貴族登用制度を取っておりまして、大会で優秀な成績をおさめたものなら誰でも兵士に取り立ててもらえ、さらに兵士として大きな武勲を上げれば騎士、つまり領地持ちの貴族になれるのです。その武闘大会が明日開かれるので賑わっているのです」

「成る程、武闘大会か……」

「ヤマトさん、出場したらどうです？」

横からフィーアが口を出してきた。

「俺が？」

「ええ、ヤマトさんならいい線いくと思いますけど」

「だが俺は国に仕えるつもりはないぞ」

「大丈夫ですよ、辞退すればいいんですから」

「はい、参加者の中には腕試しの方もいらっしゃるので大丈夫ですよ」

フィニアに乗って給仕も口を出す。

「分かった、なら出てみるか」

という訳で、ヤマトの武闘大会への参加が決まった。

王都 ガライヤ（後書き）

次回 武闘大会

武闘大会前日（前書き）

投稿した話が途中で切れていたなので同じ内容ですが、投稿します。
どなたかパソコンの話の削除方法を知りませんか？

武闘大会前日

大会に出ると決めたヤマトは、翌日宿で受付場所を確認すると、真っ先に向かった。

「それで？ フィーアはどうするんだ？」

受付に向かいながらヤマトはフィーアに尋ねた。

「え？ 私ですか？」

フィーアがきょとんとした顔で返事をする。

「ああ、フィーアはLV15だろ？ 十分行けると思うが」

「ええ！？ 無理ですよ！？ この大会は確かLV20であることが出場条件ですから」

「何だ、そうなのか？」

ヤマトががっかりした超えを洩らした。

「まさかヤマトさん、私を出場させる気だったんじゃない？」

「そのまさかだ。ま、LV制限があるんじゃないか」

「悪魔だ、悪魔がいます」

「何が悪魔だ」

ヤマトはポカリとフィーアを殴った。

「うう、その上暴力的です」

「誰が悪魔で暴力的だ。大体フィーアが無理やりついてきたんだろうが、自分の身くらい自分で守れるようになってもらわんと困るぞ」

「せっかく町から出れたと思ったのに……」

「馬鹿、顔見知りがいない分寧ろ王都のほうが危ないぞ、俺が大会に出ている間は自分の身は自分で守らないといけないんだぞ、田舎から出てきた娘なんて格好の獲物だろうからな」

「まさか、そんなこと」

「ありえないか？ 確かに王都の治安は良さそうに見えるがそれは表だけだ、路地裏とかは結構荒れてるもんだ」

そこまで言われてはフィーアも黙るしかない、一度拐われた経験もあるだけに、素直みに頷いておいた。

「いっか」

そのまま話しながら歩いていると、いつの間にか受付にたどり着いていた。

「よし、俺は受付をして来るから、フィーアはここで待ってろ」

そう言うときさっさとヤマトは受付に向かった。

一方置いてきぼりにされたフィーアだが、ものの三分もしないうちに絡まれていた。

「よう嬢ちゃん、一人かい？」

「いえ、人を待ってるんです」

「そんなこと言って一人だろ？ 俺たちと来いよ」

そう言って一人の男がフィーアの腕を取る。

フィーアは振りほどこうとしたが、相手は冒険者らしく、LV15のフィーアでは振りほどけなかった。

「放してください！」

そうこうしているうちに無理やり連れて行かれそうになっていると。

「言ったそばからこれか……………」

いつの間にか受付を終えたらしいヤマトが側で頭を抱えていた。

「ヤマトさん！」

フィーアが安堵の声を洩らす。

「何だてめえは」

「そいつの連れだ。悪いが放してもらおう」

「何だと？　おいお前ら、構わねえやっちまえ！」

とテンプレ通りのセリフをはいた冒険者モブは…………

「てめえ、覚えてやがれ！」

「月のない夜道に気をつけろよ！」

ヤマトにのされて、これまたテンプレ通りのセリフをはいていった。

ピンピロリン！　ヤマトはLVが上がった。

モテ率が56上がった。

フラグが一つ立った。

好感度が2つ上がった。

「ん？　何かいま電波を受信したような？」

何やら気になる電波を受信したヤマトだったが、今はそれどころでは無かった。

「メルダの町といい、やっぱりフィーアは可愛いから狙われるのか？」

「か、可愛い！！」

真顔でそのようなことを言うものだから、フィーアが顔を真っ赤にしていたが、それには気付くことなく大会中、フィーアをどうするか考えていた。

（宿に押し込めるか……いやフィーアのことだから出てくるな。衛兵の詰所に預ける……には年がいきすぎてるし……）

ヤマトが唸りながら考えていると。

「ヤマトさん、これから行きたいところがないなら市場に行きませんか？」

フィーアが控えめに提案してきた。

「そうだな、取り敢えずそうするか」

ヤマトもここで考えていてもどうにもならないと考えて、その提案に乗ることにした。

「しかし、流石は王都、メルダの町とは比べ物にならないな」

「そうですね、迷子になってもおかしくない気がします」

あれから市場にやって来た二人は、適当に歩いていた。

「しかし目的もないし……どうするか」

「ならお店をみたら冒険者ギルドに行きませんか？
登録しておいても損はないと思いますけど」

「冒険者ギルドか、まあ、見るだけならいいか。よしフィーア、取り敢えず一通り見たらギルドに行くか」

そう言って歩き始めた二人だったが……

「失せろ！」

「げふっ！」

ヤマトがこれで八人目となる、ナンパ、もしくは暴漢を殴っていた。

あれから市場を見て廻っている二人だが、しょっちゅうフィアがナンパ、もしくは絡まれるため、全く見回れていなかった。

「まったく、百メートル置きに絡まれてないか？　フィアは絡まれ体質か？」

「そんな体質ありませんよ！それよりこの様子じゃ買い物になりませんからギルドに早いけど行きませんか？」

「そうだな、こんな様子じゃ買い物にも観光にもならないからな」

こうして、フィアの意外な体質？が発覚して、二人はギルドに向かった。

二人がギルドに着くと、昼時だというのに人で溢れていた。

「うわっ、人が多いですね」

「これは大変だな……」

ばやきながらもヤマトはさっさと受付に向かった。

「いらっしやいませ、冒険者ギルドにようこそ。本日はどのようなご用件でございますか？」

「ああ、ギルドに登録しようと思うんだが、この人の多さはどうしてだ？」

ヤマトはまず気になっていた人の多さを尋ねた。

「はい、主に武闘大会に出場される選手の皆さんがギルドを宿として利用されているからですよ。普段はここまで多くはありません」

「成る程、ところで登録にLV制限などはあるのか？」

「いえ、当ギルドでは登録にLV制限等はありません」

「そうか、ならば逆に俺が依頼を出すことは可能か？」

ヤマトはフィーアをチラリと見てから尋ねた。

「ええ、一般の方でもご依頼できますから」

「そうか、なら護衛任務をお願いできるか？」

「ヤマトさんまさか!!」

ここまでくると流石にフィーアも気づいたらしく声を上げた。

「ああ、フィーアの護衛を頼もうと思ってな」

「護衛なんて必要ありませんよ！」

フィーアが抗弁するがヤマトは冷静に切り返した。

「普段ならそうかもしれないが今は武闘大会があるからLVの高い冒険者が集まってるからな、大会中は俺が見てる訳にもいかないから、ギルドで信頼できる護衛を雇わないと心配だ」

「うー、分かりましたよ」

フィーアは唸っていたが意外と素直に受け入れた、多分今朝の受付での出来事を思い出したらしい。

「それじゃあ頼む」

こうして大会前日はフィーアの安全確保に費やされる事となった。

武闘大会前日（後書き）

話が切れていて真に申し訳ありませんでした。

武闘大会 予選（前書き）

早めの登校です。

武闘大会 予選

あの後、ギルドに依頼を出した二人は、昼食を済ませた後、宿に戻っていた。

「さて、あの依頼を受けるやつがまともだといいんだが……」

「今まであった人達のことを考えると否定できませんね……」

部屋に戻った二人は、というかヤマトは武器の手入れと調整をしていた。

ヤマトは自分のLVと力が並外れていることを自覚しているので、どのような手加減しようかと考えているため、武器に関してかなり真剣に考えていた。

手加減し間違うと死人が出かねない。

その最中にポツリと洩らした言葉にフィーアが答えたのが冒頭である

「まあ、闘技場で試合観戦できる上に、あの報酬なら受ける奴がいないってことにはならないだろうがな」

「でも、やっぱり心配ですよね」

「まあ、心配したって仕方ないだろ」

そういつて話を終わらせると、武器を変えようか変えまいかと真剣に悩み始めると扉がノックされた。

「はい、何ですか？」

フィーアが返事をする。すると

「お客様がお見えです」

という従業員の返事が返ってきた。

「おいでなすったか」

ヤマトはベッドから腰をあげると返事をした。

「すぐ行く、下で待つように伝えてくれ」

「かしこまりました」

従業員の足音が遠ざかるのを聞きながら、ヤマトはフィーアに向き直った。

「さて、フィーアの護衛を見に行こうか」

そう言って部屋から出るヤマト、フィーアは慌てて後を追った。

「どうも」

一階の宿の受付にいたのは長い黒髪の女性だった。

依頼を受けた冒険者が女だったことに多少面食らいながらも、ヤマトはポーカークフェイスを崩すことなく挨拶した。

「あなたが護衛を引き受けてくださった方かな？ 私依頼主のヤマトです」

ヤマトが挨拶すると女性は少し驚いたように目を見開いた。

「これは丁寧な挨拶を、私が今回の依頼を受けた、アイシャ、アイシャ・クラナルードという」

そういつて、よろしくと手を出してくる。

ヤマトもそれに答えて握手したが、握っただけで目の前女性がただ者ではないことが分かった。

（この手のひらの豆がつぶれた跡、ギヤスパルクの復活じゃ見た目に変化はなくてもLVUPで筋力などは上がっていくからこれは修行ではなく長い間武器を握ってきたってことか）

「こちらこそ、アイシャさんのような方が依頼を受けてくださって光栄です。それでは、依頼内容の通りまた明日の朝こちらに来てください」

ヤマトがそういうとアイシャは一言フィーアにも声をかけると戻っていった。

アイシャ side

「あの男……一体何者だ？」

私、アイシャ・クラナルドは先ほど会ってきた依頼主の男のことを考えていた。

「まさか一発で私が冒険者だと見抜くとは……」

まずアイシャが驚いたのはそこだった。

冒険者になるのは圧倒的に男が多い、と言っても女が弱い訳ではないが、少なくともクエストを受けて生活するような冒険者になるものはほとんどが男だ。

故に、女性の冒険者は差別されることが多い、依頼主がこちらから名乗らないと気付かない、または気付かないふりをされることも多い。

しかしあの男は気付いた。 あの時あの場所には私意外にも冒険者がいたというのに迷わず しかも武装していなかった私の元に来た。

さらに私が驚いたのが私の実力を見抜いたことだ、先程の理由もあり女性の冒険者は軽く見られるというのに。

「ヤマトか……、明日の闘いで実力を見られるといいが……」

私はひさしぶりに会った強者にかなり期待していた。

ヤマト side

翌日、依頼通りアイシャが宿にやって来た。

女性なのでミイラとりがミイラになる事態は避けられそうだ。

「よし、じゃあ俺は大会に出るので先に行く。アイシャさん、フィアをよろしく頼みます」

そう言ってアイシャを見る。アイシャは昨日と違い朱色の槍を装備していた。

その武器の名前を俺は覚えていた、ギヤスパルクの復活をプレイしていた時に手にいれたことがある。 なかなかレアな武器で名前

はレッドヴァンスピア 炎属性の武器で攻撃力98 入手方法
はたしかサラマンダーを倒すと入手出来たはずだ。

サラマンダーは最下位とはいえ竜種族の端くれだ、倒すなら最低LV40は必要だったはず。

と、そこまで考えたところで大会開始三十分前を告げる鐘が鳴ったため考えるのを中断せざるを得なかった。

(……まあ、アイシャの強さを探るのは後回しにしてまずは大会だな)

そう考えたヤマトは心持ち早足で宿を後にした。

さて、会場についたヤマトであったがあまりの人の多さに辟易していた。

「全く、コ〇ケみたいになにか目当てのものがあってもかく、こういう人混みは遠慮したいな」

ヤマトがぼやいていると予選について説明があっていた。

ある程度はギルドで聞いてルールを把握していたヤマトは聞き流していた。

ちなみに簡単にルールを説明すると

いくつかのブロックに分けて行われる。

バトルロワイヤル形式で最後まで闘技台の上に残っていた者の勝ち

殺しは禁止（した場合反則負けで罰金）

といったところだ。

そんなこんなでヤマトはFブロックにきていた。

予選ブロックはAからHまで8のブロックに別れていて最後まで残っていた二人が本選進出となる。

ちなみに、ヤマトの周りには50人近い人間がひしめいていて暑苦しいことこの上ない、そんな状況もありヤマトから冷静な判断力が少しずつ失われつつあった。

「試合開始！」

故に予選開始と同時に魔法を放った。

『トルネード』

ヤマトを中心に竜巻が巻き起こり周りにいた20人近い人間を場外に落とす。

暑さから逃れる為の行為だった。しかしそれは周りの人間にヤマトの危険性を認識させることになる。

結果……

「「うおおおおっ!!」」

周りの人間が一斉にヤマトに襲いかかる。 まずは危険なヤマトを排除しようという意図がありありと目にとれた。

しかしそれは逆効果だった。

せっかく人混みから解放された矢先に自分に迫る人の群れ、暑さや人混みに対するストレスから冷静な判断力を失ったヤマトがとる行動は一つ。

『ブリザード』

彼らの排除である。

三分後、Fブロックの予選を突破したのはヤマト一人だった。

武闘大会 予選（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

武闘大会本選!! (前書き)

早く書けたので投稿です。

武闘大会本選!!

「やってしまった……」

あの後全員を倒して正気の戻ったヤマトは沈んでいた。

目立つと厄介なことになるので適当なところで危険するつもりだったのだが、これだけ注目されてはそれも難しいだろう。

「とりあえず切り替えるか」

ここまできたら乗りかかった船だ、毒を喰らわば皿まで行き着くところまで行くしかないだろう。

「目立つと厄介なんだが…」

切り替えたところで、出てきた問題は人相を知られてしまうところだ、予選ではローブを顔まで被っていたから幸いほとんどの人間には顔を見られてはいない、ならば本選でも顔を見られないようにすればいい。

この先、噂が広まってしまうことをヤマトは怖れていた。

気楽な旅が出来なくなるかもしれないのだ。

しかし、その問題はフィーアの一言で解決した。

本選は明日から行われるため宿に戻ったフィーアに言われた一言で

逆転した。

「ヤマトさん、予選は魔法しか使わなかったらしいですね、どうして剣を使わなかったんですか？」

「!!」

それを聞いてヤマトはひらめいた。　自分は魔法しか使っていない、すなわちほとんどの人間がヤマトは魔法使いだと認識したということだ。

ならば魔法使いとしてローブを被って顔を隠していても不自然ではないし、ヤマトの魔法のレベルはLV40のウォーザード相当、全力で戦っても不自然ではない。

さらに王都をでた後、剣士に戻ればあっというまに別人の出来上がり、噂が広まっても問題はなくなる。

解決作を見つけたヤマトは機嫌よく饒舌にフィーアを褒め称えた。

翌日、同じようにアイシャにフィーアを任せたあと、顔からすっぱりとローブをかぶって、ヤマトは闘技場に向かった。

それをうろんげな目でアイシヤが見ていたが、ヤマトは気づかなかった。

そしてヤマトは気付かなかった。昨日ヤマトにベタ褒めされたフィーアは舞い上がって口が軽くなっているのに。

これは後々ヤマトを後悔させることになるが、この時はまだ気づいてもいなかった。

「……………」

控え室に入ったヤマトは一斉に自分に視線が集まったのを感じていた

その視線の元を無言で見つめかえすと、ヤマトは空いてる椅子にさっさと座ると目を閉じて開始を待った。

その態度が気に入らなかったのか何人かが舌打ちしていたが、ヤマトは相手にしなかった。

そして、ヤマトが入ってから五分ほどが経過すると係員が入ってきて点呼を取り始めた。
そして簡単なルールの確認の後、全員が闘技場に出された。

控え室から出ると熱気と喧騒がヤマトを襲った。しかし昨日の予選で慣れていたヤマトは今度は冷静さを失うことなく闘技台に上がった。

「皆さんようこそおいでくださいました。第132回 王家主催
ガルガンシア武闘大会へようこそ、今回も予選を勝ち抜いた勇敢な選手をご紹介しますよう！」

「まずエントリーNo. 1 斧使いのガルシオ！」

名前を呼ばれた巨漢が己の武器を高々と掲げる。

そのあと次々と名前が呼ばれその度に選手が答えていく。

その中でヤマトの気を引いた選手がいた。

「エントリーNo. 8 エルフのエントリーゼ・ウィンラート選手です」

名前を呼ばれたのはファンタジーでお馴染みのエルフだったが、観客の声援に答えることなく黙っていたのがヤマトの目を引いた。

エルフというところも目を引いた要因だったのだろうが。

そしてヤマトの番が来た。

「そして最後にエントリーNo. 16 予選で圧倒的な強さを見

せた魔法使い ヤマト選手だああああ！」

観客が一際大きな歓声を上げる。 どうやら昨日の一件はすでに広がっているようだ。

とりあえずファイヤーボールを打ち上げて応えておく。

そして本選が始まった。

トーナメントは事前に主催者側で割り振っていたらしく、先ほどのエントリーNO. 16までの1と2、3と4が戦うといった具合だった。

ヤマトの試合は一番最後だったのでそれまで比較的涼しい控え室で涼むことにした。

「おーっと！ クリフ選手倒れてしまった。 アンセルム選手の勝ちです！」

外からは試合結果が流れてくる、マイクもないのに凄いい声だなと感心していると、ヤマトは呼ばれた。

「続きまして第8試合を行います、選手の方は闘技台に上がってください」

呼ばれたので闘技台に上がると、観衆の大歓声がつき刺さった。

「ふんっ、逃げずによくきたな」

正面をみると先程控え室で舌打ちをしていた男の一人だった。

「魔法使いのようだが、その貧弱な体でこの俺様の攻撃に耐えられるかな？」

そう言う相手、ダンカンと表示されている男は力を籠めてみせた。

服が破けて筋肉が露出する、凄まじい筋肉ではあるがここはエターナル、現実と違いLVが力の差を示し、見た目は関係しない現実ではK-1にも出れたであろう男の肉体もこの世界では関係ない。

それにヤマトは魔法使いと公言されているのになぜ力を示すのか……

疑問に思ったヤマトだが、筋肉ムキムキの上半身裸の男と向き合っている事実能耐えきれなくなり考えるのを辞めた。

「試合開始」

審判の合図で試合が始まる。

どうやらダンカンが拳闘師らしく、無手で突っ込んでくるがヤマトも座して見ているわけではない、とりあえず場外負けにしようと魔法を放つ。

『トルネード』

そして表れた竜巻はダンカンの身体ごと場外に飛ばすはずだったが……

「効かんわっ！」

なんと気合い一閃、トルネードに飛ばされることなく耐えてみせた。

「なにっ!？」

驚愕するヤマト

「我が筋肉を舐めるな！」

そういつてダンカンが突っ込んでくる。

「つつ！」

『クエイク』

慌てて土の下級呪文を唱える。

闘技場に突然土の槍が生える。

しかし……

「ふんっ！」

なんと、ダンカンは拳一つで破壊してみせた。

しかし先ほどの様子を見ていたヤマトはこれを予想、ダンカンの後ろの周りこんでいた。

そこに興奮した様子の実況が入る。

「ななな、なんと！　ダンカン選手、ヤマト選手の魔法をもともせず撃破したー！　一体彼は何をしているんだー！」

盛り上がる観客、全員の視線がダンカンに集まる、しかし彼の奮闘はそこまでだった。

『アクアボルト』

ヤマトから再び魔法が放たれる。

「ぬるいわ！」

しかしダンカンはその水球を余裕で弾く。

しかしそれがヤマトの狙いだった。

「ふはははっ！　　どうやら俺様の筋肉に手も足も出ないようだな」

と、アクアボルトを弾いたダンカンが語り始めたところに……

『ライトニング』

ヤマトの稲妻魔法が炸裂した。

「ふはははっ！無駄だと言っているだろうがべっべべべ！？」

例の如く弾こうとしたダンカンだったが、流石に雷は弾けず、先ほどのアクアボルトに合わさり思いつき感電した。

それでも尚、立っていたのは流石であるが、ヤマトからだめ押しのライトニングを食らって倒れた。

「なあ、気絶する前に聞かせてくれ。どうして魔法を弾けたんだ？」
勝ち名乗りを受けた後ヤマトは近寄り、気になっていたことを訊ねた。

それは会場にいた全員の気持ちを代弁していたが、ダンカンはこちら答えた。

「気合いだ」

こうして、最後締まらない部分もあったがヤマトは一回戦を突破した。

R A C E	S E X	A G E	L U K	W I S	I N T	A G I	D E X	V I T	S T R	C L L A S	M P 1 2 3	H P 5 3 4	L V 4 2	アイシャ	キャラクター紹介
人間	女性	1 8	8 3	2 3 3	1 8 6	4 0 2	2 6 8	2 5 3	3 2 2	ナイト					

武闘大会本選!! (後書き)

ご意見ご感想お待ちしております

武闘大会 準決勝！（前書き）

遅くなりました。どうぞ

武闘大会 準決勝！

あのあと二回戦で剣士とあたったが、ダンカンのように魔法を弾くような変態はおらず、無事に準決勝に進んだ。

「ガッハッハ、貴様貧相な筋肉の割にはやるではないか」

そしてヤマトは現在、気絶から回復したダンカンに絡まれていた。

「何故こうなった……」

ヤマトは己の不運を呪いたかったが、こうなっては仕方がない、何よりダンカンは振りほどけるような人間ではないと感じていた。

「しかし貴様のおかげで雷をも跳ね返せる筋肉を鍛えねばならないと気づくことができたからな、その点感謝しているぞ」

雷を跳ね返したらそれはもう人間ではないと思ったヤマトだが、魔法を含めヤマトの魔法をことごとく跳ね返す、もしくは弾いてみせた姿を思い出すといけそうな気がして黙った。

ダンカンはまだ魔法殺し（マジックキラー）であろう。

そんな恐ろしい巨漢に背中を叩かれながら次の試合はまだかまだかと待っていると……

「ただいまより準決勝第二試合を行います、選手の方は闘技台に上がってください」

救いの声が響いた。

「おっと呼ばれたのでいかなくは、失礼する」

「おう！　また後でな！」

去り際に聞こえた台詞はなかったことした。

「あなたですか、相手に不足はないですね」

そういつて目の前でキザにポーズを決めている男アンセルムを見る。
いかにもナルシストといった軽薄そうな外見とは裏腹にかなりの実力者である。

ヤマトの見立てではLV40以上のスペルダンサーだと読んでいる、得意攻撃はヤマトには効かないのでどう仕掛けてくるのか、ヤマトは少し楽しみだった。

「試合開始！」

そして審判の号令で試合は始まった。

『ミスト』

開始そうそうアンセルムが魔法を放つ。

これは先程までアンセルムが行ってきた戦法で魔法で生み出した霧で相手の視界を奪い、それに紛れて攻撃するというものだった。

しかし、それはヤマトには効かない

『マジックキャンセラー』

すぐさまヤマトが魔法を打ち消す、しかしその隙にアンセルムは剣を構えて突っ込んできていた。

しかしヤマトは落ち着いて対応する。

『クエイク』

ダンカン戦でも使った魔法である、突っ込んでくるアンセルムの目の前に土の槍が生える。

「くっ！」

それを避ける為にアンセルムがたたらを踏んで立ち止まる。

その隙にバックステップで距離を取ると、ヤマトは次の魔法を放つ

『ファイヤークラッカー』

炎がアンセルムに向かい突き進む。

「ちっ！」

アンセルムは舌打ちすると横っ飛びに避ける。

どうやらマジックキャンセラーは覚えていないらしい。

しかしファイヤークラッカーは拡散する性質をもつ。

「何!？」

事実、横っ飛びに避けたアンセルムの元に拡散した炎が襲い掛かった。

「がっ！」

無理矢理両腕で身体を浮かせてこれも回避する。

そこに間髪入れずにヤマトの魔法が迫る。

『ライトニング』

『ミスト』

ヤマトの魔法が放たれると同時にアンセルムも魔法を唱え姿をくります。

魔法で崩された体勢を立て直すつもりだったのだろう、しかしこの場合は失敗だった。

「があっ!？」

霧の中からアンセルムの苦痛の声が響いた。

何が起こっているのか気付いたヤマトは自身を霧が覆う前に慌てて魔法を唱える。

『マジックキャンセラー』

白い霧が晴れてゆく、とそこには片膝をついたアンセルムの姿があった。

「馬鹿な……避けたはずのライティングが何故？」

納得がいかないのかアンセルムが尋ねてくる。

ヤマトはそれに答えることにした。

「それはあんたのミストのせいだ、ライティングの直撃は避けられても霧を伝った電気は避けられなかったようだな」

そう、アンセルムが使ったミストは白い霧を生み出す魔法である、当然、霧の主成分は水であり水は電気を通す。

結果、霧を伝った電気がアンセルムを襲ったわけだ。

直撃ではないからダメージは大したことはないはずだが、霧は体全体を覆っていたため、このような結果となった。

「くっ、ならばこれだ！」

ミストによる煙幕という得意戦法を封じられたアンセルムは、次なる戦法にでた。

『フラッシュ』

突然アンセルムの周囲が光った。

突然の強力な光に観客が悲鳴をあげて目を押さえる。

「ぐっ！」

ヤマトもまた目を焼かれていた。

（油断した、まさかフラッシュを覚えているなんて……）

フラッシュはゴードেসナイトの固有技と同じ名称だが、魔法であるこちらは別物で、効果は某ポケ○ンの技と同じで強力な光で相手の目を眩ませることができる。

しかしフラッシュは呪文書が店売りしておらず、フラッシュバットという、メタルス○イム級の逃げ足のモンスターを倒さないと手にはいらない。（はぐれメ○ルほどではない）

「もらった！」

そこにアンセルムが突っ込んでくる。

気配は感じられるが、目が潰されたヤマトは迎撃も回避もできない。

「くっ！ こうなったら」

観客の目が潰されているのを利用してヤマトは勝負にでた。

（おそらく死にはしないはず！）

そう考え呪文を放つ

『ライトニングストーム』

瞬間、上空に雷雲が発生すると、闘技台全体に雷を振りまいた。

これは雷系統単体では最強の範囲攻撃呪文だ、サンダーストームと違い、風魔法が混ざってない分威力は劣るが、この程度のLV相手ならば充分だった。

「がはっ！」

雷の直撃を受けて沈むアンセルム

観客の目が回復すると、そこには倒れたアンセルムの姿と相変わらずそこに立つヤマトの姿があった。

喚声をあげる観客。

「勝者！ ヤマト」

審判の勝ち名乗りと共に試合は終了した。

決勝戦は明日ということで、ヤマトはふらつく体をひきずりながら宿に戻っていた。

観客の前では平気そうに振る舞っていたが、ライトニングストームは闘技台すべてに降り注いでおり、必然的にヤマトも直撃を受けていたのだ。

ステータス的には何の問題もなくとも痛いものは痛いわけで……

（ぐっ、と、とにかくベッドで眠りたい）

と、宿への道を急いでいたのだが……

「おおっ！　そこにいたか！」

ダンカンに捕まってしまった。

冷や汗をかきながら冷静に対応する。

「な、なんでしょうダンカンさん、何故あなたがここに？」

「なんだ、冷たいことを言うな、先程また後でと言ったではないか」

確かにそう言われた記憶はある。しかしヤマトはそれを認めたくなかった。

「さあ、飲みにくぞ」

ささやかな抵抗を示そうとしたヤマトだったが、その前にダンカンに襟首を押さえられてしまう。

「いや、俺はまだ未成年で……」

「硬いことを言うな、そのくらい気合いでなんとかしろ」

「いや、だから……」

今や本気でダンカンから逃れようと暴れているヤマトだったがどうあっても脱出できなかった。

（馬鹿な……LV96の俺のSTRですら押さえ込むなんて……）

戦慄するヤマト

そしてそのまま、酒場に連れて行かれて深夜まで筋肉について語られたヤマトだった。

RACE	SEX	AGE	LUK	WIS	INT	AGI	DEX	VIT	STR	CLASS	MP	HP	LV	ダンカン
人間？	男性	22	368	423	86	156	186	523	999	拳闘師	678	721	46	

武闘大会 準決勝！（後書き）

ご意見感想お待ちしております。

決勝戦開始！（前書き）

遅くなってすいません。私生活が忙しく6月くらいまでは週一くらいのペースで投稿になると思います。

後、後書きでアンケートをやっているので答えていただけると作者が喜びます。

決勝戦開始！

「さあ、ガルガンシア武闘大会もいよいよ大詰め、決勝戦だああああああ！！！」

司会者の絶叫にこたえて観客が歓声をあげる。

「今回は異様にレベルの高い内容となりましたが、そんな中決勝まで進んだ二人の選手を紹介しましょう！」

その言葉を受けて二つの人影が舞台に現れる。

「まずは、今大会の紅一点 美人な上に魔法も一流エルフの美少女、エルトリーゼ・ウィンラート選手だああああ！！！」

その言葉で歓声が（特に男から）沸き起こる。

しかしそんな観客の熱狂ぶりとはうらはらに冷静に舞台にあがるエルトリーゼ。

そんな姿にますます歓声（主に野郎を中心に）大きくなる。

「さあ続いては、並みいる強豪、優勝候補をなぎ倒して勝ち進んできた、素顔は不明のヤマト選手だああああ！！！」

またもや歓声が巻き起こる。

こちらは女性の歓声が比較的大きい、どうやら素顔が見えない分かなり空想ができているようだ。

「では、早速ですがルールの説明に参りましょう。 決勝もこれまでとおなじく………」

司会が興奮した様子でルールを説明していく、どうやらこれまでと変わらないようだが、わざと開始を引き延ばすことで観客の興奮を煽るつものようだ。

待ってる間、手持ちぶさただったヤマトはエルトリーゼに一言声をかけていた。

「いい試合にしよう」

「………ああ」

なにやら警戒されているのかエルトリーゼは僅かに返事をしたのみだった。

「と、以上になります。 さあ！ 皆さんお待ち致しました。
いよいよガルガンシア武道大会決勝戦の開始だ！ さあ、お二
方、準備は宜しいですか？」

「ああ」

「問題ない」

「了解です！ さあ、それでは試合いいいいいい開始！！」

司会者の絶叫と共に試合は始まった。

『ファイヤークラッカー』

開始と同時にエルトリーズが範囲攻撃魔法で仕掛けてくる。

『ファイヤークラッカー』

それを同じくファイヤークラッカーで迎え打ったヤマトだったが……

「なに！？」

ヤマトのファイヤークラッカーは押し戻され、倍の威力となって襲い掛かってきた。

『アクアボルト』

慌てて水魔法で相殺しようとするも、まさに焼け石に水であった。

「ぐっ！」

慌てて今まで隠していた身体能力を生かして避けようとするも、左腕を焼かれてしまう。

「がっ！」

苦痛の声を思わず上げるヤマト、やはり痛いものは痛いらしい。

しかし、それでもステータスのお陰か、態勢を崩すことなく仕切りなおすヤマト。

一方、魔法使いとは思えない身体能力を見せた、ヤマトを警戒してか、エルトリゼは追撃してこなかった。

そのため、ようやく一息つけたヤマトはエルトリゼに話しかけていた。

司会者が興奮して何かを叫んでいるがどうでもいい。

「やるな、まさか威力負けするとは思わなかったよ」

「……貴様、何者だ？」

そんなヤマトの声には答えず、警戒した顔でヤマトを睨み付けるエルトリゼ

「その身体能力、魔法使いのものではあるまい、高LVの戦士系の職業ではないと不可能なはずだ」

どうやら今の一瞬の攻防で見抜かれたらしい

「……知りたければ俺を倒すんだな！」

今度はヤマトから動いた。

『ライトニング』

ヤマトの拳から稲妻が沸き起こる。

「くっ！」

エルトリゼは避けようとするが、すかさずヤマトの第2撃が迫る。

『クエイク』

エルトリゼの足下の地面が隆起して、一瞬足場を取られたエルトリゼの動きを封じる。

「貰った！」

「くっ、させるか！」

ヤマトが直撃を確信した瞬間、エルトリゼが呪文を唱える。

『ファイヤーボール』

しかし、それはライトニングを迎撃する訳ではなくなんと地面に叩きつけられた。

「何!？」

爆発した、ファイヤーボールは地面の砂を巻き上げて、ライトニングの追尾効果をなくす、魔法は対象を認識していなければ例外を除き、外れることを利用したようだ。

「くっ！」

しかし足下を崩されていたせいか、完全には避けきれなかったようで、苦痛の声が聞こえた。

しかし、流石は高LVの魔法使い、魔法耐性は高いようでたいしたダメージにはならなかったらしい、その証拠に。

『フレイムストライク』

砂ぼこりが晴れると同時に攻撃を仕掛けてきた。

『フレイムバズーカ』

それに対抗してさらに上級呪文を唱えるヤマト、フレイムストライクより上位の呪文だというのに、フレイムバズーカは相殺されてしまった。

それを見てヤマトはエルトリゼのジョブに確信を持つ。

「読めた、どうやら君はパイロマンサーのようだな！」

パイロマンサー……火神シュラハーに誓いをたてたものが慣れ

る、ジョブで、炎魔法に補正効果がかかる。

「これで、始めのファイヤークラッカーが負けた理由が分かった」

魔法のLVはほぼ同じ、そして炎系統の魔法を使えばただの戦士職のヤマトに勝ち目があるはずがない

「となれば……手数で勝負だ！」

ヤマトは戦法を変えた。

「いくら炎でも稲妻や、風魔法は防げないはず！」

『ライトニング』

『ウィンドファルコン』

そういつて、ヤマトは魔法を放つ、
稲妻と青いエフェクトと共に鳥型の風魔法が飛ぶ

「くっ！」

それを見たエルトリゼはライトニングをサイドステップで交わすとウィンドファルコンにファイヤーボールをぶつけた。

途端に倍加した炎がヤマトに襲い掛かる。

「くっ、風を利用したか！」

炎は風を受けて勢いを増す。

それは当たり前のことだが、ヤマトはこの世界にきて日が浅い、そのため、魔法が物理法則を無視したものであることを忘れてしまう。ふつう炎は風下に向かうがファイヤーボールはそんなことにはお構い無しに風を受け、勢いだけを増しながら向かってくる。

「ちっ！」

ヤマトはそんな初歩的なミスをおかした自分に舌打ちしながらも、一瞬で、その場から移動、ファイヤーボールを回避すると、範囲攻撃魔法を叩きこんだ。

『ブリザード』

上級呪文がエルトリーズに襲い掛かる。

『ファイヤークラッカー』

一方、エルトリーズも範囲攻撃魔法を放って対抗してくる。

「バジュウウウウ」

熱した鉄を水 に浸けた音を何十倍にもした音が聞こえた。

一気に辺りには水蒸気が巻きあがり、視界を塞ぐ。

計らずも、ミストをかけたときと同じ状況となっていた。

そこをヤマトは見逃さない、素早くライトニングを放つ。

ヤマトの声に気付いたか、もしくは準決勝を見ていたか、少し慌てたように霧から出てきたエルトリーゼだったが、ヤマトの狙いはそこだった。

『マジックミサイル』

ヤマトの両手の指から追尾性をもつ光線が飛び出してエルトリーゼを襲う。

「なっ!?!」

霧から脱出するのに夢中だったエルトリーゼは咄嗟に反応できない、結果……

「がっ!?!」

マジックイミサイルの直撃を受けた。

威力はヤマトが手加減したため軽く吹き飛んだだけですんだのだが、闘技台の中央に漂う霧から逃れるため、闘技台の端にいたエルトリーゼは闘技台から落ちることとなった。

そして……

「勝負あり！ 勝者！ ヤマト選手！！」

審判の声が響き。

ガルガンシア武道大会の優勝者が決定した。

「ヤマトさん、おめでとうございます！」

ヤマトが商品の授与やら表彰を受けて控え室に戻ると待ち構えていたフィーアに祝福の言葉を述べられた。

「ああ、ありがとうフィーア」

「見事だったな」

ヤマトがそう返事をするとなぜかそこにはダンカンがいた。

「まさかあのような筋肉を隠し持っているとは……さすがこの俺を倒しただけはある。たいしたものだ」

「ええ、どうも……」

ヤマトはもうなぜダンカンがここにいるのかは聞かなかった。聞いても無駄だと分かっているのだ。

「やるじゃないか」

そう言われて振り返るとそこにはフィーアの護衛を頼んでいたアイシャの姿があった。

「あつ、アイシャさん。護衛任務ご苦労様です」

「何、面白いものを見ることができたからな、むしろ感謝している」

「そうですか、それはよかったです」

「ああ、それではまた後でな」

「おっと、俺も失礼するぞ。 また後でな」

そう言ってアイシャとダンカンは部屋を出て行った。

「また後で？」

またもや不吉な言葉を聞いた気がしたが、ヤマトにその事を考えている時間はなかった。

「失礼するぞ」

ダンカン達が出て行った後の扉をノックして、対戦相手だったエルトリゼ・ウィンラートが入ってきたからだ。

「おや、なぜ貴女が？」

意外な訪問者にヤマトが驚いていると、エルトリゼの方から話かけてきた。

「まずは今日の勝利おめでとう、まさか私が倒されるとは思っていなかったよ」

「ありがとうエルトリゼさん、しかし勝てたのは身体能力のおかげだよ、魔法では相手になっていなかった」

「エルと読んでくれ。しかし、君が見事な戦術で私に勝利したのは事実だ、私は敵であれ、聡明なものには敬意を表すさ」

「ふむ、まあそこまでいうなら素直に先程の賛辞も受けておくよ」

「そうしてくれ、さて、私がここに、いや君に会いにきたのはそれだけではない」

そういつて目付きを鋭くするエル

「それに関しては言えないな、ただし言うなら君の想像通り私は魔法職ではないよ」

「では、スペルダンサーか？」

エルがそう尋ねてくる。

「いや、スペルダンサーではない、ただ君が想像しているジョブではない、とだけ言っておこう」

正直な話、ヤマトの職業であるドラゴンナイトはファイターという初級職のまま、HPが五桁にもなるドラゴンを三百体近く倒さないとれない、エターナルにおいてはほとんどなるのは不可能なのである。

そんな職業が知られているはずがなかった。

「そうか、それ以上は話せないということか？」

「ああ」

「そうか、では最後の用件だ」

「何だ？」

「君はこの国に仕える気はないか？」

「何？」

ヤマトは突然の言葉に眉をひそめた。

「いったいどういことだ？」

「なに、ようは君をスカウトしているのだ」

「そうではない、なぜ君がそのようなことを？」

「ああ、つい一月前からだが。私はガルガンシア王国に宮廷魔術師として仕えているんだよ」

「なに？」

「私は見ての通りエルフだ、それで珍しいので旅の話聞かせてくれと頼まれて城に招かれたさい、魔法の技能をお見せしたら仕えないかと聞かれて二年の期限付きで仕えている」

「そうか、ということは」

「ああ、この大会に出ていたのは実力を再確認させるためと有望な者がいないか確認して陛下に報告するためだ」

「なるほど、そういうことか」

「そうだ、で？　仕える気はあるか？」

「ないな」

「そうか、一応理由を聞いておこう」

「自由に生きたい。それだけだ」

「……わかった手間をとらせて悪かったな」

「いや」

「君はヤマトといったな？」

「ああ、ヤマト、シヨウゴイン・ヤマトだ」

「そうか、ヤマト。　またどこかで会いたいものだな」

「そうだな、また会えること祈っているよエル」

そう言ってエルは去っていった。

「疲れた……宿にもどるか」

こうして、ヤマトの長い1日は終わった。

翌日

「…………どうしてこうなった」

ヤマトは頭を抱えることになる。

決勝戦開始！（後書き）

さて、アンケートです。

ダンカンはこのまま仲間にするべきか？

してほしい人はして欲しいと、反対の人はするべきではないと感想からお答えください。

仲間にならない場合は、当初の予定通り、味方、助っ人的な役割での登場となります。もちろん仲間にした場合のシナリオもなんとか作っておりますが

だは今から5日で締め切らせていただきます。

作者のわがままですがお付き合いいただければ幸いです

新しい仲間？（前書き）

遅くなってすいません、レポートやらなんやらで忙しくてなんとか更新ペースは維持したいです。

新しい仲間？

「おう！　起きたか！　ヤマトよ、ぼさつと突っ立ってないでとっとと行くぞ！」

「あ！　アイシャさん、食糧はもう少し積んだほうがいいですか？」

「ああ、ダンカンがいるからもう少しあったほうがいいだろうな」

朝、気持ちよく目覚めたヤマトを待っていたのは何故か見覚えのある二人組だった。

「む？　ヤマトよ膝などついてどうした、筋肉が足らんのか？」

「いや、筋肉なら充分足りているが……」

ダンカンが話かけてきたのに律儀に答えてしまうヤマト

「じゃなくて！」

と、普通に返事してしまった自分に気がついて声をだすヤマト

「なぜ二人がここに？」

改めて尋ねなおすとそれぞれがおのおの理由を述べてきた。

「貴様に負けて筋肉の未熟さを知ったのだが、雷を跳ね返す筋肉を

鍛えるにはすぐそばに雷魔法を使える輩が必要なのに気づいてな、貴様についていけば色々鍛えられて一石二鳥だと思ったのだ」

「なるほど……そうですか」

ため息しか出ないヤマトであるが、すでにダンカンを止めることが不可能なのは知っているので同行を認めることにした。

(……まあ、話し相手が増えるのは歓迎すべきことか)

「で？ アイシャさん貴女は？」

正直なぜついてくるのかわからないヤマトである。 ヤマトは大会中は魔法しか使わなかったし、手合わせがしたいといった様子ではないが……

「あ、ヤマトさん。 それは私が説明します！」

そういつて何故か横からフィーアが入ってきた。

「なんだ、どうしてフィーアが出てくる？」

「実はヤマトさん、私アイシャさんに弟子入りすることにしたんですよ」

何故か胸を張りながら言うフェリア

「へー、そうか。 ならここでお別れだな、ザツカンランさんに

はちゃんと手紙を出しておけよ」

そう言って立ち去ろうとするヤマト

「ま、ままま待ってください！ どうしてそうなるんですか!？」

それを慌てて引き留めるフィーア

「なんだ？ 何かまだ用があるのか？」

うろんげな顔をしてふりかえるヤマト

「どうして離れるんですか！ アイシャさんが私達についてくるので離れる必要はありませんよ！」

「なに？」

それを聞いたヤマトは眉をひそめた、正直ダンカンならいくらでも旅先で実力をごまかす自信があるが、アイシャ相手だとそれはない

「何故ついてくる必要がある？ 別に無理してついてくる必要はないし、彼女なら充分やっていけるだろうに」

「いえ、それがアイシャさんがヤマトさんについて行きたいと」

「なんだ、言葉だけ聞けば愛の告白だな」

「メルダの街でのヤマトさんの活躍ぶりを教えてあげたら興味が沸いたって言ってました」

「……………」

「あいたっ！ 何するんですか!?!」

ヤマトが無言で拳をうち下ろして、フィーアが頭を抱えた。

「あれほど喋るなど言っておいたのに！ 　いつ話した!!」

「えっと、大会の2日目でしたけど」

「そうか……」

たしか予選の後か……フィーアを誉めてやったからな、うかれて喋ったか…………

「どうしてもついてくる気か？」

「ああ」

「フィーアを鍛えるなら俺たちについてくるのは良くないんじゃないか？」

「別に構わない」

「……フィーア」

「なんですか？」

「……メルダの街に戻るぞ」

「ええ！？　　どうして！？」

「ザッカンランさんのところに戻すからそこでアイシャさんと修業している」

「ええー！　　そんな無茶苦茶な！？」

「嫌なら置いていくぞ」

と、なんとかアイシャをなんとかしようと必死だったヤマトだったが

「……君がおとなしく私の同行を認めるなら君の実力については黙っておこう」

「なに？」

「メルダの街での活躍は調べさせてもらったよ」

「……………わかった」

ガックリと膝をつくヤマト。

どうやら相手のほうが一枚上手だったようだ。

ピンピロリン♪

ヤマトは仲間をてにいった。

筋肉バカ ダンカンをてにいった。

謎の女騎士 アイシャが仲間になった。

「では…………自己紹介でもするか…………」

あの後、宿を引き払い王都を出た四人は、フィーアが業者を務める揺れる馬車の中ヤマトの提案で自己紹介をしていた。

「うむ、我が名は ダンカン・ドラムート ウィゴナ王国元国
境警備隊長だ」

「ウィゴナ王国国境警備隊長か？ 通りで高LVな訳だ」

「なんだ、アイシャは何か知っているのか？」

「ああ、ウィゴナ王国国境にはワイバーン達が住んでいるからな、危険なためその国境警備隊は生かなことではやっていけないこととで有名だ、そのため精鋭が揃っており、近隣でも有名な存在だ」

「ほお、つまりその警備隊隊長というのは？」

「ああ、そこらの將軍よりは強いな」

「うむ、縄張り争いに負けたワイバーンが近隣の村を襲ったり、我が国とガルガンシア王国との交易ルートを脅かしたりするものでな」

「へー、ということはワイバーンを倒したことがあるのか？」

「ああ、三体ほど倒したことがあるな、といっても縄張り争いにまけHPが四分の一以下のやつだがな」

「それでも大したものだ、なにせワイバーンのHPは五桁に達するからな」

「ふむ、博識だな。知り合いにドラゴンタイマーでもおるのか？」

「いや、たまたま知っていたただけだ」

「それじゃあ次は私が挨拶しよう。私の名前はアイシャ・クラナールド　ベルアダン王国の元天馬騎士団団長だ」

「むっ、それはまた大物だな」

「ダンカン、知っているのか？」

「ああ、たしか女ながら東の大国ベルアダン王国で騎士隊長となりその後冒険者となった騎士、たった一人で百人近い賊を取り押さえたことから山賊殺しの二つ名がついたと聞いた、ちなみに騎士時代の二つ名は……」

「炎風」

「そう炎風だ、たしかその槍を振るう姿からついたそうだな」

「…………昔の話だ」

そう言ってそっぽを向くアイシヤ

「どちらもうえらく高LVだと思ったらまさか騎士隊長や警備隊隊長ときたか……そんなやつらがなんで冒険者を？」

「うむ、国境をないがしろにして私腹ばかり肥やしていた大臣のヤツを思わず殴ってしまっただけ」

「奇遇だな、私も煩惱丸出しの第二王子がセクハラをしてきたのでな、思わず殴り飛ばしてしまった、それで女ということで絡んでくる輩もいたのにな、スパッと辞めてやった」

「ああ、そんな理由か」

「ところで今からどこに向かっているんだ？」

「ああ、ウイゴナ王国だ。 ワイバーンが欲しくなったな」

ヤマトはそう言って横になった。

ドラゴンティマー（前書き）

遅くなりました

ドラゴンテイマー

モンスターテイマー

それはモンスターをテイム、つまり手懐けることが可能な職業である。

野生動物の範疇に収まるモンスター（つまりアンデットやデーモンなどは除外）であれば、ボス級の強力なモンスターであってもテイム可能。

ただし、強力なモンスターになればなるほどテイム成功確率は指数関数的に低くなる。

テイムに成功したモンスターはサモンモンスターとは違い、戦闘に参加させて経験値を貯めればどんどんLVUPして強くなる。

従って強いモンスターテイムして育成に励めばサモンモンスターより強力！　しかし、テイムモンスターは手がかかるので最強への道のりは果てしなく険しい。

なにしろ、FODメーターが下がって空腹になると、テイムしたモンスターは野生化してしまう。　また復活アイテムがないエタールナルにおいては、死ねば育成の苦労が水の泡……………。

なお、テイムモンスターはアイテムのように売却できるし、他の職業の者が扱うこともできる。　ただし扱うのがテイマー職でない場合、FODメーターの減りが早い、時々いうことを聞かなくなるなどのデメリットが発生する。

ちなみにティマー職においてはドラゴンティマーが最高職である。

「あー、だるいやっぱりクッションを買っておくべきだったな」

現在ヤマト達は王都ガライヤを出て五日のところにあるメトード村にいた。

「なんだヤマトよ、そんなに揺れるのはダメか？」

「ああ、なんと言うか……尻が痛くなるのでな」

ダンカンの問いかけに普通に答えるヤマト

共に旅をして五日、ヤマトも碎けた話しかたになっていた。

現在ヤマトとダンカンが馬車の前でフィーアとアイシャを待つ雑談をしていた。

現在ヤマト達がいるのは王都から北西に150キロ　ウィゴナ王国との国境から少し離れた場所にいた。

「それでヤマトよ、そろそろ目的地を教えてはくれぬか？」

ダンカンがヤマトに尋ねる、なぜなら王都を出て五日　ヤマトの
先導するまま一行は旅をしているからだ。

「いっただろ、ドラゴン、もしくはワイバーンを手に入れに行くつ
て」

「だからそこは何処だと聞いておるのだが」

「そうか、しかし具体的な地名は俺にはわからん、ただ友人に教え
て貰ったのでな」

ヤマトがこれから向かう場所はゲームでも隠れエリアとでもいう場
所であった。

ファイターにクラスアップしたヤマトが、どのクラスになるか決め
かねていた時友人が教えてくれたのがこの場所であった。

そのお蔭でヤマトはドラゴン300体の討伐を成し遂げ、ドラゴン
ナイトになることができた、その友人はドラゴンティマーで、ヤマ
トと同じくそこでドラゴンをティムしたという。

（たしかあいつはレッドドラゴンをティムしていたな……）

ヤマトはボスモンスターティム厨である友人のことを思い出ししてい
た。

「まあ、竜の谷とでも言うておくか」

ヤマトはそうダンカンに返事をするそのまま黙って目を閉じた。

同時刻 竜の谷

「なんだお前らは？」

黒のジャケットを身にまとった青年が、不気味な眼を意匠とした旗を掲げた一団と対峙していた。

「なに、別に怪しいもんじゃないよ。ただドラゴンをテイムしに来ただけさ」

その集団から一人の女が進み出て話す。

「そうか、ならばなぜ俺のモンスターに手を出した？」

「ん？ あんたのモンスター？」

「キングベアーとクイーンアントだ。貴様らが倒したんだろう？」

「あら、こんなところにいるなんておかしいと思ったらあんたのモンスターだったのかい、こいつは悪いことをしたねえ……」

「まさか気づかなかったとでも？」

「そう言ったら？」

二人のあいだに火花が散る。

「……まあいい、おまえらを倒したところでGは手に入らん。慰謝料を払えそうしたら許してやる」

青年が女の向かってそういう放つ

「ふうん、あたしたちに向かってビビるわけでもなく手を出すわけでもなく慰謝料ときたか……やるねえあんた」

「なんだ、払う気があるならさっさとしろキングベアー百万、クインアント五十万だ」

そう言って急かす青年。

「まあ待ちなよ、あんたあたし達の仲間にならないかい？」

「断る」

「即答かい、少しは話を聞かないかい？」

「時間の無駄だ、そして貴様らは払うつもりがないと、なら即刻立ち去れ」

「ふうん……すこし痛い目見ないとわからないみたいだね」

「……やるのか？」

「ああ、聞き分けの悪いガキはお仕置きしないとねえ！」

「マリーさん！」

「おまえたち、援護しな！」

女、マリーが剣を抜くと、後ろに控えていた男達が一斉に構えた。

「……ふん、やる気か

……クロウ、ジーク！」

「呼んだか主」

「ここに」

青年が呟くと後ろの茂みと山からレッドドラゴンとシルバーウルフが現れた。

「な！？」

「ドラゴン、しかもレッドドラゴン！？」

「北大陸の王者 シルバーウルフまで！？」

「……他のやつらも使って連中に思い知らせてやれ」

「……御意」

「了解だ、主」

そう返事すると二頭は臨戦体制をとる。

「ちっ！ まさかタイムしてるのが知恵のあるボスモンスターとはね、一体どれだけ高LVなんだい！？」

マリーがいまいましそうに吐き捨てる。

「主に楯突く雑魚どもが……ファイヤーブレス！」

そして次の瞬間、レッドドラゴンが吐き出したファイヤーブレスがマリー率いる教団を襲った。

「なんか……嫌な予感がするな………」

ヤマトがそう呟くと同時に馬車が走りだした。

ドラゴンタイマー（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

戦闘後（前書き）

遅くなつてすいません 10日以内には投稿できるようにしたいと思ひます。

戦闘後

青年と教団がぶつかってから2時間後……

「な、何があったのだ？」

「……………」

ヤマト達が竜の谷に着くと、そこはまるで戦争があったかのような有り様だった。

「何かいるかもしれないな、フイーア、油断するな」

「はい！」

「む？　これは……………」

「どうしたダンカン？」

ヤマトが振り向くと、ダンカンが地面にかがんで何かを調べていた。

「ヤマトよ、これは一筋縄ではいかん事態のようだぞ」

「なに？」

「ドラゴンの足跡だ」

重い声でダンカンと言った。

Side教団　マリィ

「はあはあ、冗談じゃないよなんだいあの化け物じみたガキは!？」

「マリィさん、お怪我は……?」

「もう回復した。大丈夫だよそれより誰か殺られたかい？」

「いえ、死亡者はいません。ただほぼ全員がHPが赤まで削られまして半死半生といった感じです」

「そうかい、ところであのガキはどうなったかわかるかい？」

「いえ、ただこちらもそこそこのダメージは与えたので無事ではないでしょう」

「そうか……なら今は回復に専念しな、体勢を立て直したらあのガキにとどめをさしに行くよ」

「わかりました」

（しかし、LV40台ばかりのあたし達を相手にあそこまでできる
とは一体何者なんだろうねえ……）

side end

side???

「ちっ！ 思ったより殺られたな」

『しかし主よ奴等はかなりの高LV揃い仕方がないだろう』

『さよう、むしろ死なずにすんでおるだけでも行幸かと』

「ああ、確かにそうかもな、それで？ 敵の戦力は？」

『ああ、おそらく全員がLV40以上、人数は30人といったところだ』

「成る程、通りで意外に攻撃力が高かった訳だ」

『うむ、それで内訳だが主と同じティーマーが5人、戦士職が15人

魔法職が10人といったところだ』

「ふん、たしかにワイバーンをティムするなら十分な布陣だな」

『だがこちらは奴等を仕留めることが出来なかった。それにたいていしてこちらはやられすぎたな』

「今のこちらの戦力は？」

『ヘルハウンドは全滅、ボス級モンスターも我々をのぞき全滅、他はそこそこ残っているが、戦力にならない 戦力になるのはワイバーン二頭とフェンリル一頭、それに我とクロウ』

「ふむ、相手に出来ない訳ではないな」

『しかし問題なのは奴等は回復スピードが速すぎるからだ、いくらダメージを与えても倒せん』

「だな、よし雑魚はもういいから野生に返せ」

『む？ではどうするのだ？』

「世話するのが無駄だ、必要な奴だけに絞るべきだろう」

『しかし奴等も困ぐらいにはなるだろう』

「だろうなしかし先程の騒ぎで餌がなくてな、正直養いきれん、逃がせば奴等を襲うかもしれんしな」

『そうか、主がそう言うならそうしよう』

「頼むぞ、しかし厳しいな、せめてもう一頭ワイバーンをティムするか」

『今からか？ 正直我らも傷を負っておる得策とはいえんな』

「クロウ、お前は太してダメージを受けてないだろう」

『ふん、まさか我にワイバーンを相手にしろと？』

「そのまさかだ、クロウ、ワイバーンを ボコボコにしてから連れてこい、倒したら駄目だぞ」

『全く……ドラゴン使いが荒い主だな。 了解だ』

「よし、じゃあジーク、クロウ、任せたぞ」

『『御意』』

二頭は頷くと深々と頭を下げた。

sideヤマト

「戦闘の後か……」

あれから周囲を調べたヤマト達はここで大規模な戦闘があったことを知った。

「ドラゴンだけでなく、ヘルハウンドやウルフの足跡、その他かなりのモンスターとの戦闘があったようだな」

「たしかに、しかしこんなに種類の違うモンスターがいたとは思えないくらい、おそらくテイマー、もしくはサモンマスターがいたのだろうな」

「ああ、俺も同意件だ」

「我輩も同じく」

「しかし、もしかしたらそのテイマーは知り合いかもしれん」

「む？ それは本当かヤマトよ」

「ああ、さて、では後を追いますか」

そう言ってヤマトは出発させた、目指すは竜の谷の中腹、竜の腹だ。

戦闘後（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

友との再会（前書き）

遅くなりました。

友との再会

ヤマト達が出発してから二時間後、ヤマトはフィーアを連れて山道を登っていた。

「ヤマトさん、本当にここに人がいるんですか？」

「ああ、俺の勘が正しければ、あいつならここにいるはずだ」

「でもダンカンさんたちはいいんですか？」

「仕方ないだろう、馬車では登れんし馬車を放っておくわけにもいかないだろう。あいつらなら大丈夫だ、あいつらには俺より上の経験というものがある」

「そうですけど、じゃあ私はどうなるんですか？」

「まあ、俺がいるし滅多に襲われはせんさ」

「そうですか……なら」

「なら？」

「この周りにいるモンスターをなんとかしてください！」

山に登るヤマト達の周りにはモンスターがひしめいていた。

「大丈夫だ。襲ってこないだろうが」

「確かにそうですけど、怖いものは怖いですよ！」

「落ち着け、俺から離れない限り大丈夫だ」

「それはさっき聞きましたけど……なんで襲ってこないんですか？」

「それは俺がスキル『威圧』を発動しているからだ」

「スキル、ですか？」

「ああ、ドラ○エという聖水のようなものだ。と言ってもわからないだろうが、要するに弱いモンスターが襲ってこなくなるスキルだ」

「へー、便利なスキルですね」

「便利だが、力量、つまりLV差がないと効果はないし、パッシブスキルじゃないから意図して発動しないといけないし、なにより発動してると10秒毎にHPを1削っていくからな」

「でも便利ですよ」

「まあな、つと！ 着いたぞ、あれが龍の腹だ」

「あれが………」

ヤマト達の目の前に広大な崖が現れた。

「この岩棚にだいたいいるんだが……おい、清明！」

「ん？ 何者だ？」

ヤマトが大声で呼び掛けると返事があった。

「俺だ、ヤマトだ！」

「何！ ヤマト？」

ヤマトが再度呼び掛けると、声の主は驚いたような声をあげるといきなり目の前に影が降りてきた。

「きゃあああああ！？」

それを見て思わず悲鳴をあげるフィーア、何せ目の前にいきなり巨大な狼が現れればそれも当然である

「おう、晴明、元気か？」

しかし、それを無視してヤマトは狼に話しかけた。

「へえ、その声はやはりヤマトか。 久し振りだな」

すると、狼の背から返事がある」

『ほう、主の友人か？』

「まあな、それにしてもやっぱりお前までここにいたんだな」

「ふん、まあ予想はついていたさ」

「やっぱりか、俺もお前と会うような予感がしてな」

「やはりそうか、ところでそろそろ降りろよ」

「おっと、悪いな」

声はそう返事すると、狼の背から飛び降りた。

「ふん、相変わらずの格好だな」

「うるせえ!」

降りてきた友人をみてヤマトが評する。

「お前はいつも黒い服しか着てないな、なんだ一体?」

「ふん! 俺が何を着ようと俺の勝手だ」

「まあ、そうだが」

「あの……すいません」

話が進まないと感じたフィーアがおずおずと話しかける。

「お二人は知り合いなんですか?」

「うん? お前は誰だ?」

「あつ、すいません。私はフィーアといいます。 ヤマトさんについて旅をさせていただいてます」

「そうか、俺は安倍晴明だ、よろしくな」

「ええと？ アベさんですか？」

「おっと、間違えたみたいだな。 正確にはハルアキ・アベだ。」

「はい、ハルアキさんですね！」

「ふっ」

フィーアが名前を復唱すると、何故かヤマトが笑った。

「なんだ？ なにが可笑しいんだヤマト？」

「別に、ただ偽名を名乗るのはどうかと思ったただけだ」

「ふんっ！ ここは異世界だ、わざわざ訂正する必要もないだろう」

「そんなことでいいのか？ 先祖の名が泣くぞ」

「ふん、陰陽師だなんてほんとかどうかとも疑わしいんだ、別に誇ることもない」

「ふん、相変わらずだな」

再び始まるやりとりについていけずに固まるフィーア、しかし今度は狼が話を止めてくれた。

「まあ、そんなことは後にするがいい。 主とその友人よ、今は

「それどころではないだろう？」

「ちっ、そうだったな」

「ああ、そのようだ」

ピッタリ意見が合う二人をみて、この二人は親友なんだなあ…と思ったフィーアだった。

まずはヤマトが口を開いた。

「俺の用件と質問を聞いて貰いた」

「ああ、分かった」

「最初俺はお前にワイバーンをタイムしてもらいに来たん」

「ふん、だろうな、それ以外にタイマーであるこの俺に会いにくる筈がない」

「ああ、しかしそれはやめだ、そしてハルアキ、これが本題だ」

そこで一旦、ヤマトは言葉を切った。

「ハルアキ、お前は一体何と戦った？」

そのヤマトの声は重くその場に響いた。

「ちっ、参ったな。 いつ気付いた？」

暫しの沈黙の後、ハルアキは降参とばかりに両手をひらひらと掲げながら話した。

「なに、ここに着いた時だ、なにせ街道にあれだけのモンスターの足跡が残っていれば誰でも分かる」

「しかし、それだけならただのモンスターの争いとは思わないだろう？」

「ああ、しかしその中にドラゴンの足跡があったからな。 流石にそんなのがそこらをうろついてるわけないし、いたとしてもこんなモンスターに構う筈がないからな」

「ちっ！ クロウのやつ、足跡を残してやがったか」

「ということはあのドラゴンはお前の？」

「ああ、俺の相棒だ、今ワイバーンを捕まえにいつてるからな、戻ったら紹介するさ」

「そうか………とここでお前が戦った相手は何者だ？」

「さあな、ただ俺のタイムしたクイーンアントとキングベアーを倒されたんでな、賠償金を請求したらふざけたことをぬかしたんでちよっとお灸を据えようと思ったんだが……………」

「思った以上に強かったというわけか……」

「ああ、ありゃ全員40LVはあったぞ」

「え、嘘!？」

ハルアキの発言を聞いたフィーアが悲鳴をあげる。

「なんだ、うるさいぞフィーア」

「だ、だってヤマトさんLV40以上の集団って……あり得ないですよ?。」

「何を言っている、ダンカンやアイシャだってLV40はあるだろうが」

「一緒にしないで下さい!!」

フィーアが叫ぶ

「いいですか? ヤマトさんは感覚が麻痺してるみたいですけどLV40クラスなんて各国の將軍くらいで国に一人か二人なんて状況なんですよ? 大陸最強と謳われる冒険者のパーティーでもリーダーがLV40いくかどうかで、残りはLV30台です。大体LVが30あれば冒険者ではAクラスになります。これはギルドの

基準になりますがLV1～5がEクラス、6～9がDクラス、10～20がCクラス、21～29がBクラス、30～39がAクラス、そしてLV40～49がSクラス、大陸に30人ほどで、ほとんどが名前を知られています。ちゃんとダンカンさんとアイシヤさんも知られてますよ！、つまりLV40以上の集団なんて普通あり得ないんですよ！」

「へえ、意外とLV低いな。もっと上のクラスはないのか？」

長々とフィーアの説明を聞いたヤマトは呟いた。

それを聞いたフィーアは呆れたように説明を始めた。

「ありますけどほとんど伝説ですよ？ 確か上にSSランクというのがあるって、LV50以上が条件ですけど百年に一人いるかどうかですし、SSSランクっていうのもありますけど、それはLV70以上で伝承でドラゴンに挑んだ騎士様ただ一人らしいです」

「へえ、なら俺はSSSランクか？」

「ああ、俺もSSSランクだな」

しかしあつさりとそれに答えるヤマトとハルアキ

「ええええええええええええええええ！？」

フィーアの驚愕の悲鳴を聞きながら、そういえば隠してたなと思つたヤマトだった。

あへはるあき
安倍晴明

陰陽師安倍晴明の子孫とされる安倍一族の長男、
名前はまだま
安倍晴明からとられているが、読み方は違う。

先祖である安倍晴明の血を継いだのか、式神契約の才を継ぎ、似た
ようなテイマー職に対し才能がある。 職業はゴッドテイマー

名前の通り神を従えることができるが、もちろん、七大神のような
神は無理で小さな土地神クラスならタイム可能である。（精霊も可）

それはもちろんモンスターにも適用され、ほぼ全てのモンスターの
タイムが可能、実際にしているように原作に出たヴァイオンさえテ
ィム可能である。ただし成功確率は宝くじが当たる確率くらいであ
る。

ハルアキ

LV86

職業ゴッドテイマー

R	S	A		L	W	I	A	D	V	S	M	H
A	E	G		U	I	N	G	E	I	T	P	P
C	X	E		1	1	8	4	2	5	4	1	
E	男	1		5	0	6	2	5	8	5	3	9
人	性	8		6	2	5	3	6	0	6	6	8
間					3						8	6

最凶の魔法

「ええ！？ お二人ともLV70以上なんですか？」

「え？ おう、そうだけど」

「ん？ 言ってなかったか？」

とりあえずヤマトはしらをきることにしたようだ。

聞いてませんよ！ と叫ぶフィアを後目にハルアキと話し合い始めた。

「で？ 俺の要請は？」

「聞いただろ、もう無理だ」

「ちっ！ まあ仕方ないか………ってまてよ？」

「ん？ どうしたヤマト？」

「なあ、フィア」

「はい？」

何で教えてくれなかったんですかと騒いでいたフィアに訊ねる。

「本当にLV40以上はそれだけしかないのか？」

「ええ、たぶん。もちろん隠れている人がいないとは限りませんけど、いたとしてもそう多くはないと思います」

「なるほど……そうか。よし！ ハルアキ、俺も手伝ってやる」

「あ？」

「聞こえなかったか？ 俺も手伝ってやるって言ったんだ」

「……急にどうした？」

ヤマトは友情の為に命をかけるなんてキャラではない。

「なに、ちょっとその連中に興味が湧いてな」

「なに？」

「フィーアの話しだとそんなに普通は高LVがゴロゴロいないはず、しかし30人近い人数がいたって言うじゃねえか、ならつまりそれらは日本人、いや地球人の可能性が高い」

「ほう、つまり？」

「やつらは俺たちが元の世界に戻るための方法を知っている可能性が高い、知らなくてもそんな連中にコネを持っておくのも悪くない」
つまり、ヤマトの中にあっただのは打算だった。

「となるとフィーア達は邪魔だな……フィーア！」

「はっ、はい！」

「馬車に戻ってアイシャ達と一旦王都に戻ってろ」

「はい！ ってええええええ！？」

「なんだ、うるさいぞ」

「いや、そしたらヤマトさんはどうするんですか？」

「とりあえずはO・H A・N A・S Iかな？」

「響きが不気味なんですけど……」

「ああ、ダンカンはあるように伝えてくれ、正確にはお前とアイシヤで先に戻れ」

「え？ ダンカンさんですか？」

「ああ、そしたらアイシャと戻ったら城にいるエルトリーゼというエルフに伝言を頼む」

「なんて言うんですか？」

「気が変わった、話がしたい」

「……それだけでいいんですか？」

「ああ、念のため、保険ってやつだ」

「……分かりました。それでそれを伝えた後、何をすればいいんですか？」

「んー、とりあえずし損ねてたクラスアップを済ますといい、その後はアイシャについて修行すればいいさ」

「はあ、わかりました。まあヤマトさんですし」

「おい、どういう意味だ？」

「いえ、それじゃ行きます！」

「あっ！　おい！　……ったく」

「きゃああああ！！」

「一人で降りたら襲われるだろ………」

ため息をつき、フィーアの後を追うヤマトだった。

「という訳だ、ダンカン頼むぞ」

「むう……あまり気が進まんのだが」

「まあ固いことを言うな、これも筋肉の為だ」

「むっ、筋肉のためなら仕方ない」

「ああ」

「……………今ので納得したのか？」

「ああ、やつは魔法を弾く変態だからな」

「……………まあいい。それでどうするんだ？」

「まあ、まずは話し合いかな」

「話し合い？ そんなことができる？」

「お前は無理だろうが、俺とやつらは初対面だ、話を聞く可能性は高い」

「ふん、で？ 何故ダンカンとやらを呼んだんだ？」

「そりゃあ、お前。交渉決裂の場合は逃げるしかないだろう」

「は？ 逃げる？」

「ああ、その時に地の理があつたほうがいいだろう？」

「……………だからあの女を逃がしたのか」

「ああ、それより頼むぜ？」

「ふん、言われなくてもあの連中には痛い目をみてもらう」

「よし、じゃあクロウとやらが戻ったら作戦開始だ」

「その必要はないな」

「なに？」

「ほれ」

ハルアキが指差す方向をヤマトが見ると、そこには赤い鱗のドラゴンがワイバーンを追いかけているところだった。

「おう！ クロウご苦労」

『主よ、そう思うなら早くタイムしてくれ』

「おっと、そうだな『ギアス』」

ハルアキが魔法を唱えるとワイバーンがピクリと動きを止めた。

「うまくいったか、相変わらず恐ろしい魔法だなそれ」

「うるせえ、黙ってろ！」

「そういうとハルアキはワイバーンのタイムにかかった」

「ヤマトよ、今の魔法はなんだ？」

「ああ、あれは『ギアス』強制の呪文だ。効果はそのままだな」

「つまり？」

「ああ、相手に強制を強いることができる魔法だ」

「なるほど、それは恐ろしいな」

「ああ、いまのはワイバーンの動きを封じただけだが、人間にギアスと精神支配の呪文をかければあつというまに自らだけに絶対服従する忠実な兵士の完成だ。実際、ほかのラノベじゃやってる作品があつたな」

「ラノベとはなんだ？」

「ダンカンにとっての筋肉のようなもの、つまり俺にとってのバブルだ。気にするな」

「ほう、そんなものがあるのか」

「まあな、まあこつちじゃお目にかかれない代物だ」

「それにあれはハルアキの職業、ゴッドティマーだからこそその魔法だ。ギアスで相手に止まることを強制したあと精神支配マインドコントロールでティムする。もちろん、限界もあるがそこの雑魚ならギアスだけで片がつく、まあ、ギアスも精神支配の魔法も相手より魔力、MPが多くないと効かないという欠点があるがな」

「む、つまり戦士系職業には聞くが魔法職には効きづらいということか？」

「ああ、ゴッドテイマーは戦士系に対して圧倒的に有利だが、魔法職相手には逆に不利なんだ、魔法耐性も低いしな」

「ふむ、万能とはいかんか……」

「そりゃあな、強力な力はそのぶん弱点がでかい、俺だって魔法も使える万能職のようだが、LUKが低いから確率魔法に弱いし、相手の攻撃がクリティカルヒットする確率が高い」

「ふむ、やはり筋肉が最強ということか……」

「どうしてそうなった」

「やはり魔法だな、よしヤマトよライトニングを頼む」

「俺の話を聞け」

「ふははは！ さっさと従えこの○○○が！」

『……………大丈夫だろうか』

『わからん』

サモンモンスター達の不安そうな声が響いた。

交渉決裂（前書き）

遅くなりました

交渉決裂

ワイバーンをティムして、なんとか戦力を整えたヤマト達は、作戦を立てていた。

「相手のほうが数では上だ、こちらのアドバンテージはワイバーンがいて空を飛べるということだけだ」

「それは分かっている問題はそれをどうするかだ」

「それを補うのがここだ」

そういつてヤマトは頭をとんとんと叩いてみせた。

「ふん、また質の悪いことを考えているな。まったく悪知恵だけは働く奴だ」

「知略に富んでいると言いやがれ。さて交渉が決裂したら奴等に「げえ!?!? 孔〇!?!?」と叫ばせてやるぜ」

「それは違う(ヾ・ω・)だろ」

「まあ、そのくらい奴等をビックリ仰天させてやるって言うてるんだ」

「まあいい、それならとっとと話しやがれその策とやらをな」

「ああ……ダンカンこい」

ヤマトは二人を呼び寄せると作戦を話し始めた。

「あのガキ、見つけたらただじゃおかないよ」

翌朝、負傷者の手当てなどを終えて体勢を立て直したマリー達教団はハルアキがいると思われる頂上を目指していた。

「しかしマリーさん。いいんですか？今回倪下から下された命はワイバーンのテイクですけど」

教団員の一人が尋ねる。

「構わないさ、倪下はワイバーンをテイクするよう仰ったけど逆に言えばそれさえ果たせば文句はないってことだよ」

「はあ、しかしあの少年、侮れない力の持ち主です。こちらにも被害が出るかもしれませんが……」

「それは考えてあるさ、だからテイマーの連中は魔法使い達と一緒に下げてるんだからね。被害が出ても剣士だったらティムに支障はないからね」

「わかりました……」

男はすぐに引いた、頭に血が上っているようにみえて意外とマリーが周りをみていたからだ。

「とにかくもうすぐだね、気を引き締めな」

「はっ！」

部下を率いたマリーは岩棚にたどり着いた。

「あのガキはこのあたりにいるはずだ、徹底的に探しな」

そう命じたマリーだったが……

「おっと、ちょっと待ってくんないか？」

岩棚にいた人影に待ったをかけられた。

「何者だい!？」

剣を抜くマリー達。

「おっと待ってくれいきなり攻撃したりはしないさ、ただ少しあんたらに聞きたいことがあってね、出来ればお話ししたいとおもったのさ」

「ならまずこっちに顔をみせな、それが常識だよ！」

「ヘイヘイ」

そういうと人影は崖から飛び降りて悠々と着地してみせた。

「これでいいかい？」

「その服、あんたガイヤ人か」

「ガイヤ人？」

「地球人と言ったほうがいいかねえ、あんたは日本から来たんだろう？」

「ご名答、といたいところだが何故貴様がそんなことを知っている？」

「年上には敬語を使いな、そうだねえ、それについては教えてやらないこともないんだけどね」

「なら教えてもらおうか」

「それには条件があってね、あたしたちの仲間になってもらわないと困るのさ」

「なに？　ならお断りだ。　しかし一応聞いておいてやろう、お前たちの目的は何だ？」

「邪神ギヤスパルクの復活さ、ただそのためにはいろいろと準備が必要だね、こうしてここにきているのもその一環ってわけさ」

「なるほど」

（まさか邪神の復活ときたか、しかし今の名前、ギヤスパルクはゲームのタイトルと同じ……こいつらにかあのゲームと関係があるな）

「ひとつ聞きたい、お前らギヤスパルクの復活となにか関係があるのか？」

「そうさ、あのゲームはあたし達で作ったものだよ」

「そうか、なら地球とあの世界を行き来できるというわけだな」

「そういうことだよ、ただそのためにはある程度信用が必要だからね、仲間になってもしばらくは無理だよ」

「それには及ばない」

「なんだって？」

「てめえらのせいで……今週のジャンプがつつっ！！」

「はあ？」

「死ねやあああああ!!」

ヤマトが合図すると同時に、崖が崩れた。

「なっ!?!」

「ハルアキ!」

「あいよ」

ヤマトの合図でクロウに乗ったハルアキがヤマトを回収する。

「ちっ! 全員崖の崩落に巻き込まれないように下がるよ!」

教団もマリイの言葉を受けて一斉に下がる。

「おいヤマト、あれでいいのか?」

「ああ、聞きたいことは聞き出せた」

「けどおまえジャンプがどうか「それは気にするな」……わかった」

「それより作戦第二段階だ。ジークとダンカンに合図を出せ」

「わかった」

「主からの合図だ、行くぞ！」

「おう、筋肉は準備万端だ！」

「では行くぞ！」

ジークとダンカンはいバーンを率いてヤマトの指示通りの場所に
むかった。

「むっ！いたぞ」

そしてジーク達が見つけたのは……

「な、なんだあれは！？」

「ワイバーンだ！！」

マリーたち教団が残っていたティマー達だった。

「行くぞ！」

護衛に多少の魔法使いと剣士もいたが剣士はワイバーンの炎に焼かれ、魔法はダンカンに弾かれた、そしてティマー達はジークに倒された。

これで教団はいバーンをティムするという目的を果すことができなくなった。

「よし、では指示されたポイントに向かうぞ」

「おう、筋肉も震えておるわ」

ジークとダンカン達率いる別動隊は次のポイントに向かった。

「くそっ！ あのがきどもなんてことをしてくれるんだい！！」

「マリーさん、待機中だったティマー達がゴールド達が襲われている！」

「何だって！？」

慌ててマリーがそちらを見ると、ワイバーンが火を吐きながら襲いかかるところだった。

「くそっ！ やられた、まさかこっちの考えを読んでいたってのかい！？」

（あのがき、一体何者なんだい！？）

「マリーさん、どうします？」

「狼狽えるんじゃないよ、とりあえずゴールド達を助けにいくよ」

「「「はっ！！」」」

マリーの命令を受けて教団は走り出した。

「あれ？ 立て直してきたか意外だったな、いやまあこうなった
ら分からんでもないが」

「どうしたヤマト？」

「いや、次はどうしようかなと思ってな」

「？ このまま奴等を殲滅するんじゃないのか？」

「そう思ったが嫌な予感がするからなあいつらに嫌がらせで岩を落
としたら撤退だ」

「勘か……まあおまえの勘は当たるからな今回は引いてやるが……
いつかあいつら潰すぞ？」

「ああ、帰るにはあいつらの力があるみたいだしな」

「よし！じゃあ帰るぞ、ダンカン達に合図を」

「おう、『ライトニング』」

ヤマトが呪文を唱えると稲妻がそれに光った。

「主からの合図だ、作戦中止！ 作戦2号に移る、主と合流して岩を落としたら撤退だ！」

「おうっ！」

その合図を受けて戻ってきたダンカン達と合流したヤマトは、マリ―達教団に岩を落として溜飲を下げるとどこかの悪役のように去っていった。

sideマリ―

「くそっ！ あのがきどもただじゃおかないよ！」

幸い死者は出なかったものの骨折といったダメージを受けたものが多く、回復呪文では治せない現状で、ティムは諦めるしかなかった。

「しかしなんで諦めたのかねえ、腹立たしいけどあのがきどもはあたし達を全滅させることもできたはずだ」

「怖じ気づいたんじゃないんですか？」

「あのがきがそんなことでやめると思うかい？」

イライラしながら考えていたマリーだったが、そこに見知った者から声がかかった。

「これはマリー、随分とひどくやられたな」

「っ！？ ダイスかい？ そうかだからやつらが退いたのか」

「ご名答、しかし倪下からお前達の援護に行くよう命じられて来てみれば、この有り様とはな」

「悪かったね、ご覧の通り任務は失敗だよ」

「そうだな、本来なら叱責したいところだが、今回は倪下が不問になされるそうだ」

「なんだって？」

「倪下が言うには今回君が相手にしたやつらはとんでもない魂の力イデアの持ち主らしい」

「そうか、倪下がおっしゃるなら今回はおとなしく退いておくよ」

「そうしろ、とりあえず君は面が割れてるからな、彼らの捜査は僕が引き受けるさ」

「わかった、任せたよ。だがくれぐれも注意しなよ、やつらはとんでもない力と知恵の持ち主だからね」

「倪下と君に忠告させる連中だ気は抜かないさ」

（あのがきども、今度あったら容赦しないよ！）

こうして、ヤマト達と教団の最初の邂逅は幕を閉じた。

次回予告

マリィ達を撃破したヤマトは王都ガライヤに舞い戻る、そこで彼らが見たものは！！？　そして彼らをおうダイスだが思わぬ罠が待っていた、次回やっぱこの季節はかき氷が一番！　練乳は好み

で！

謁見

マリー達に嫌がらせで石を落とし、溜飲を下げたヤマト達は先に帰らせたフィーアやアイシャと合流すべく王都ガライヤに向かった。

ちなみに騒ぎになりそうなのでワイバーンはクロウに預けてジークの背に乗って走っていた。

「いや、しかしサモンモンスターは便利だな」

「ああ、その辺の馬車なんぞより断然速いからな」

「うむ、我が輩の所属していた警備隊でもバルゴンを飼い慣らしていたぞ、やはり馬よりモンスターのほうが速いからな」

「だな、で？ パーティー参加の意思は固まったかハルアキ？」

「ああ、あんな連中と事を構えたならお前らと組むしかないだろう」

「ならばよし、それなら俺は心当たりを探ることにする」

「心当たり？」

「ああ、お前がいたことで確信したがギヤスパルクの復活をプレイしてた人間はほとんどたぶんこちらに来てるか、もしくはこちらにくるだろう」

「つまり強い連中を見つけて仲間に加えるってか？」

「ああ、だが俺が仲間にしたいのは夜光の奴だ」

「げ……あいつかよ」

「まあそう言うな、再従兄弟だろ？」

「だから嫌なんだよ」

「あとは明日香だな」

「あいつもか？」

「しかたねえだろ、ギヤスパルクの復活をやってるやつで強い奴っていったらこいつらしいねえだろ、大丈夫だ。前にGNでランキング上位1234を独占した仲だろ？」

「はあ、しゃあねえか」

『主よ、そろそろ着くぞ』

ハルアキがため息をついたところで、ジークが到着の胸を告げた。

「おお、久しぶりだな」

「俺は初めて来たがな、で？ どこに行くんだ？」

「城に向かってくれ、エルトリーゼってエルフがいるはずだ」

「りょーかい、ジーク」

『承知した』

ジークに乗ったまま一気に城まで走る。

門番に止められたけどエルトリーゼから貰った書状を見せたらあっさり通された。

街に入ってからサモンモンスターでもジークのようなものは珍しいのだろう、すれ違う人間全てが目を丸くしていた。

そういえばモンスターや幼獣の持ち込みは禁止だったか？

城の門でもエルトリーゼから貰った書状を見せて案内されるとそこにエルトリーゼとフィーア、アイシャがいた。

「ふむ、よく来たなヤマト。　しかしまさかこんなに早く戻って来るとは思わなかったぞ」

「ふん、なにこいつのサモンモンスターに乗ってきたからな、速いのは当たり前だ」

「そうか、君とは初対面だな。私はエルトリーゼ・ウィンラート。陛下に仕える宮廷魔法使いの一人だ」

「そうか、俺はアベ・ハルアキだ。　こちら風に言うならハルアキ・アベだが。　ヤマトとは腐れ縁だ」

「そうか、とりあえずかけられよ」

そう言われて席につくヤマトたち

「さてヤマト、君がその少女。　失礼、フィーアに託した書状を

読ませて貰ったが……確かか？」

「ああ、自ら接触して確認も取った、間違いなくやつらで間違いない、教団と名乗っていたがどうやら今は資金集めなどの最中のようだな」

「ふむ、一応聞かせてもらうがなぜそうとわかる？」

「ああ、俺たちが奴等と遭遇したのは隊商も通らないような山の中だ。奴等の目的はワイバーンのタイムだったんだが、奴等の真の目的を考えるとまったく関係がなかったからな」

「その真の目的というのはなんだ？」

「ああ、奴等は教団と名乗っていたがその真の目的は暴虐の邪神ギヤスパルクを復活させることにあり、そのためそのしもべである魔神を解き放とうとしているらしい」

「……確かか？」

「ああ、だから今は資金集めだとか魔神の封印場所を探ってるんだろうな、ワイバーンのタイムは戦力を集めるためだろう」

「そのために強盗や商戦の襲撃、を影で操っていると？」

「ああ、治安を悪くして諜報活動をしやすくするうえに資金も稼げて一石二鳥というわけだろうな」

「なるほど、よくわかった。しかしギヤスパルク、その名前を思いがけず聞くことになって驚いている」

そういうとエルトリーゼはチラッと後ろに視線を向けた。

「ギヤスパルク、その名を思いがけず耳にして驚いている。私たちエルフは人間がよりも文明の勃興がずっと早く、それゆえ長い歴史を持つ種族だ。それで私たちの国には人間たちの知らない古の歴史について記された文献や写本がたくさん保管されている。私はゆえあって国を出奔したのだが、故郷にいたころ、そうした文献をよく読んでいた」

「で？ あったんだな？ その中にギヤスパルクの名前が」

「ああ、最初のエルフであるエランが記したとされる最古の書物にその名が登場する。暴虐の邪神ギヤスパルク。それはエターナルの神々の中で最後に生まれた。際限なく力ばかりを求める、強大にして悪魔。これが成長しきってしまえば後の世の禍になると、軍神ゴードスを中心に光、闇、炎、風、水、大地の神が集って戦いを挑んだ。そしてギヤスパルクを7つに引き裂き、エターナルの各地に封じたという」

「—————」

「ギヤスパルクの名はその最古の文献にのみ記されており、今述べた以上のことは私も知らない。しかし……ギヤスパルクか……。城づきの占星術師も、最近来年あたりにひどく不吉なことが起きる予兆が天に現れていると報告している」

「なるほど、そちらの事情はよくわからんがエターナルになにかが起きつつあるのは気づいていて、それが教団であり、そちらもそれとは関係なく教団を追っているため優秀な人材を求めている、つま

り利害は一致しているというわけだな」

「そのとおりだ。 教団についての情報をもたらしてくれたこと、感謝する。」

「いや、こちらこそこちらの協力は得たかったからな」

「そうか、ところでその少女が話すには君たちは特筆すべきステータスの持ち主なのとか。 前回は拒否されたが ここでそれを見せてもらっても構わないだろうか？」

「……いいだろう。 ただし他言無用に頼む」

そう言ってヤマトとハルアキがステータスウィンドウを開くとエルトリゼはもちろんのこと、その場にいた全員が目を剥いた。

「なんだそのLVは！ そちらの三人は？」

エルトリゼが尋ねるとダンカン達もステータスウィンドウを開いた。

「そちらの二人も強いなまさか炎風と岩拳殿か？」

「……ああ、そうだ」

「むっ、懐かしい呼び名だな」

「ふむ、しかし君達二人に比べれば常識の範囲内だ。 いずれ名のある人物と見受けるが生国はいずこか」

「日本だ」

「ニホン？」

「知らないはずだ。並大抵のことではたどり着けない場所にある」

「ほう」

「そうだ、これもいっておくが教団には日本人が深くかわっているらしい。それもあって、俺たちは教団について調べている」

「なるほど」

エルトリーズは口を閉ざし、また後ろをチラッと見た。

「話はわかった」

突然目の前の壁からすうっと人が現れた。 どうやらなにかの魔法によってある、と見せかけていただけの壁だったようだ。

現れたのは立派な口髭を蓄えた初老の男だった。

ヤマトはさすらいの旅人から領地持ちにクラスアップした。

「まあ、そんなことだろうとは思ってたぜ」

現れた男を見て驚くまでもなくヤマトは言いになった。

「ほう、気づいておったか。 まあ許せ、余は国を預かる大切な身、警護に気を配らねばならぬのだ」

王は威厳漂う厳めしい顔を少しほころばせた。

「異国の勇士達よ。 ぜひ見せたいものがある。 ついてまいれ」

そう言って王は今しがた出てきたのとは別の壁に入った。

「ここはトリックハウスかよ……」

ばやきながらもヤマトが続き、それにエルトリーゼ達が続く

壁の向こうの螺旋階段を降りきると広い空間が広がっていた。

そこには大量の兵士が詰めている。

「ふん、ものものしいな」

しかし発言とは裏腹にヤマトは妙なプレッシャーを感じていた。

「ここだ」

そういつてガルガンシア王は兵士達の前を通り、奥にある鉄の扉の前に行くと、大きな鍵を取り出して錠前をはずした。

「あの扉の向こう、いったいなにがあるんです？」

王の後に続こうとしたヤマトに兵士の一人がたずねた。

「さあな、ただ一生知らなくていいものだと思うぜ」

「やはりそういう類いのものですか」

そういつて兵士はため息をついた。

「まいれ」

王様が扉をくぐって手招きした。その先になにがいるのか、ヤマトは予想を立てていた。

扉をくぐってしばらくは狭い通路が続いた。

ますます強くなるプレッシャーにヤマトは顔をしかめ、フィアは吐き気がするらしくアイシャに背中をさすってもらっていた。

そして突然、広い空間に出た。

「こいつは………」

横でハルアキは絶句し、ヤマトは予想が当たったことに舌打ちした。そこには光が巨大な格子状の扉を形成していた。その向こうには

おぞましい怪物の姿があった。それは伸縮を繰り返す真っ黒な球体で、大小無数の目玉をもっていた。瞳孔の色は青や赤や黄色や緑などさまざまだが、どの目も血走り、相手の心を押し潰すような異様な力を発していた。

フィーアは声もなく立ち尽くしていた。他のダンカンやアイシャといった面々も同様、剣士達も王様の手前気丈に振る舞っているものの、嘔吐感をこらえている様子だった。

入り口に目をやると、二本足で直立した大亀の神――大地神グラ・ドの神像があった。

「さっきのエルトリーゼの話からすると、こいつが七つに引き裂かれたギヤスパルクの一部ってことになるのかな？」

「魔神ナディンゴラだ」

ガルガンシア王は睨むように、挑むように、怪物を見据えて言った。

「この地には、国を治めるものに古くから受け継がれてきた口伝がある。『いづとも知れぬ果てなき古、神々によりて封印された悪しき魔神、名をナディンゴラ。この封を守るは王の務め、永劫にわたりて守るべし』……。サルドルバ王朝の開祖初代獅子王はこの口伝を前王朝から受け継いだとされ余の祖父、初代ガルガンシアもやはりこの口伝を受け継ぎ、前王朝と同様、兵をおいてこの封を守っておる。この怪物の正体については口伝以上のことは伝わっておらん、しかし人目でもこやつを見れば、邪悪かつ強大な存在であることは理解できる。絶対に外に出してはならん、この封が破れることは国の滅亡を意味するのだと直感的に理解できる」

「確かに、賢明な判断だな。腐敗した王朝すら守る封印か……まあ当然でもあるな」

「うむ、戻るとしよう。このおぞましい怪物は見ているだけで心から正気が失われていく」

王様は吐き捨てて踵を返した。

部屋に戻るとほっとした雰囲気 flowed。

「さて、ヤマトよ」

「はい、なんででしょう」

「あの魔神ナディンゴラはギヤスパルクのしもべと思うか」

「思います」

「しかし、この地に伝わる口伝には、ギヤスパルクの名は出てこない。これについてどう思うか？」

「おそらく真実を隠し、風化させることで、教団のような存在が知ることを防ごうとしたのだと考えます」

「なるほど、理にかなっている……釘を刺すまでもなからうが余が見せたものについては他言無用だ。興味本位であれに近づく輩があらわれぬよう、あれの存在は秘匿しておく」

「心得ております」

「うむ」

ヤマトが返事すると王は重々しく頷いた。

「教団という組織についての情報、感謝する。こちらもそのような組織の存在について感づいてはいたが、なかなか調べ始めたばかりで情報がてに入らずにいたのだ」

そういうと王はヤマトやハルアキの装備を観察するように見た。

「ところでヤマト、それにハルアキよ。余の見たところ、その黒い服は異装なれど、ただの服に見える」

「これですか？　これは国を出た際に着ていたもので、ただの服です。特別な効果はございません」

「お前たちほどの力を持つものは、普通、それ相応のものを身に付けておるのだが」

「諸般の事情がございまして、装備品は大したことはございません」

「なるほど、金に困っているのか。では、率直に言おう。余に仕える気はないか？　国を支えるは人。優れた人材は国の宝。ゆえに余は勇士を好む。お前たちほどの力の持ち主であれば、すぐにも爵位と領地を与え、召し抱えたい。余に仕えよ。余の臣として教団について調査するのだ」

「……受けてもよいですが条件がございます」

「申してみよ」

「1つは始め半年は自由に動く許可をいただきたいのです」

「ふむ、それくらいならむしろそなた達程の勇士と引き換えなら安いものだ」

「もう1つはいくらか支度金を頂きたい」

「容易いこと、余の臣となるのならば問題はない」

「では最後に、一度故郷に帰ることをお許し願いたい」

「それもよい、条件は以上か？」

「はい」

「よろしい、ではヤマト、ショウゴインよ、そなたに支度金300万Gを与え、スワエルド地方と伯爵の地位を与える」

「ははっ、慎んで拝命いたします」

「うむ、今日からそなたは余の臣下である。今後とも励むように」

「はっ！」

「ふむ。ハルアキよ、そなたはどうする？」

「俺、ではなく私も拝命いたします」

「うむ、ではそなたにも支度金とスワエルド地方に男爵の地位を与えよう」

「ははっ！」

「うむ、ではエルよこのものを任地まで案内せよ」

「はっ！」

「ダンカンにアイシャ殿そなたたちはどうだ？」

「せっかくですが……」

「お断りします」

「うむ、そうか。ではヤマト達の助けとなってくれ、では余はそなたたちのことを皆に知らせるとしよう」

こうして、ヤマトはさすらいの旅人から領地持ちにクラスアップした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3135q/>

RPGW（・∀・）RLD 蒼い騎士

2011年9月19日23時10分発行